
魔法な少年と魔法な世界

一月 哀輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法な少年と魔法な世界

【Nコード】

N1586S

【作者名】

一月 哀輝

【あらすじ】

魔法と科学が共存し、魔法が一般的に使われるようになった世界。その中で入学したての高校生、白空哉つくもくうやとその取り巻きの日常生活（それでも魔法SFです）

待ち合わせ

突然ではあるが、魔法というものについて考えてもらいたい。

まあ、そのまんま考えれば、「魔の法」、つまり人ならざる者によつて加えられた力、とでも言うのか。

22世紀の後半、80年代に確認されはじめ、時代に変革をもたらし、今では多くの人が使い、しかしいまだに謎の多いこの力は、人類にとって良いものなのか。

しかし、その力が人に帰するか、それとも何か別の者の力なのか、それは考えても全く無意味なことだろう。

だって、何の力だったとして、それを使うのは人なのだから――

うう、さぶ。

突然吹いた風に、俺は身を縮こませた。

なんだってこの春になろうとする季節に、こんな寒さになるんだよ。具体的に誰にぶつけるべきなのか分からない憤りを抱えて、なんとなく右隣の自動販売機を見た。

コインを入れるところは21世紀初頭から変わらない、というか変えようのない様なデザインをしているが、中は見た目からは想像できないようなハイ・テクノロジーだ。

まあ、それ以前に常識なんだけど。

落ちてきたコインを不可視光線で判別して形状を見たうえで、そうと仮定されたコインかを重量で確かめる。正規の硬貨と判断されなければ、返却される。

うーん、寒いし、コーヒーでも買おうとしようかな。ブラック、ブラツク。

そう思ってジーパンのポケットから財布を出し、自販機の前に立つ。

目はいつも飲んでるステイタス・コーヒーを探す。

……………あれ？

ここって、ステイタス、なかったっけ。

あの味がいいのになあ、と思いつつ、適当に他のブラックを見つけ
て購入する。コーヒーなんて、苦みさえあればどれでもいい。

じゃあなんでこたわってるんだよ、と自分で自分に突っ込みを入れ
つつ、ガコン、と落ちてくるコーヒーの缶を待ってさっきの位置に
戻る。

プシュ、と開く缶の音がなんとなく心地よい。

一口目を口に含む。うん、問題なく苦い。

二口目を口に含んだところで――

「くうやー、待ったかー！？」

含んだばかりのそれを吹き出しそうになった。

危ねえ、今吹きだしたら、対処する魔法が絶対に使えなかった。

大声で呼ぶなコラ。

もともと往来の多い道なので、結構な人数がこっちを向く。

うわ、恥ずい、これ。

とりあえず仕返しにちょっとばかり痛い目にあってもらうことにし
て、その声のした方向へ近づいた。

「いつてえ、なにすんだよ」

「なにすんだよというか、動機にはすべからく原因があるべきだ。
自分で考えてみる」

この少し俺と身長と同じ（腹立つ）ふざけたやつは、あけや・なるな緋夜鳴奈とい
う。

こんな言葉遣いだが、女だ。

これで幼馴染というのだから、見方を180°程変えればあんなことやこんなことも考えられないではないが、現実はそうではない。まあ俺も高校に入学する年齢なのだからそういうことを夢見ないでもないが、所詮夢だ。夢に過ぎない。

俺の名前は、白^{つくも} 空哉という。年は、高校に入学する年だ。

「つつかな、可愛い笑顔で手を振って駆け寄る女の子の腕を貫くつて、どんな奴だよ」

「おまえは可愛い女の子ではないのは言わなくてもわかるからそこに突っ込むのは差し控えさせていただくとして、俺がお前に怒る点は3つだ」

「ん？」

「1つに、こんな往来の多い道で大声で呼ばれると恥ずい」

「いいじゃんか、そのくらい……おおっと、その握ったこぶしを広げるんだ、空哉！」

「……、2つに、自分から待ち合わせておいて遅れるんじゃない。

3つ、その自販機、ステイタス・コーヒーがなかった！」

「それは俺のせいじゃねえ！」

握りしめた拳で殴ろうとする。だが俺も受けるのは嫌なので左にかわした。

……中指の指輪に髪が数本、やられたが。

指輪だが、その役割は見せることで果たされるものではない。もっと、実用的なものだ。

「ったく……どうみても、魔法を使う外道より、その純粋な拳で制裁を下す俺のほうが正義だろ。」

「まあ俺のほうが悪かったのは認めるが、この場合はどちらも正義ではなかるうに。で、どっか行くのか？」

どっか途中で空き缶を捨てたいのだが。

「ああ、そのためにお前に来てもらったんだ。」

遅れたくせに。心の中で毒づく。反して、こいつの顔は輝く。

「新オーブンの上級カフェ、ルーヴだ！」

なる——こいつの通称というか呼び方だ——がその名字の意味するところ、緋夜家に向けて、どんな感情を抱いているのかは俺の知るところではないが、一度、俺がそんな質問をしたら、こんなことを答えてくれたことがある。

『重いし、めんどくさい』

らしいといえらしい答え方である。

が、それだけで済まないのが事情というものだ。

緋夜という名は、日本の魔法会において大きく幅を利かす朱浦家あかつらの分家であることを示す。

朱の浦、緋の夜。

勿論、他にも分家はあるのだが、しかし物騒な名である。

血を彷彿とさせる。

まあ俺はその名の由来を知らないし、もしかしたら本当にそれが由来、なんてこともあるかも知れなくて。

小学から一緒だったわけなのだが、俺はその頃のなるをよく覚えている。本人というより、その取り巻く環境を。

名字が意味するところは小学生なりにも理解していたもので、「あの」朱浦の分家というのは、それは十分に子供の疎外の理由だったのだろう。

その名前の意味することを一番知っていたのはなる自身だったし、当人は泣きも憤りもしていなかったのだが。

しかし疎外されている姿を見て、可哀そうだとも当然だとも、なんとも思わなかった俺は、何故かなるに声をかけた。

それから、友達は普通にできていき、何事もなかったかのように他のやつに加わっていった。

それだけの話で、ちゃんちゃん、と終わりたいが、なるは最初に声をかけた俺に、他よりも多く声をかける。

迷惑は迷惑で、その線を越えないところは褒められるところだろうが。

そんなこんなで、一緒にカフェや喫茶店などに入るのは全く驚くに値しない。

……高校生（直前）がそんな店に入ってもいいのかはこの際、考慮しないでおこう。

待ち合わせ（後書き）

初登校です↑誤変

魔法が普通に使われ、科学とも共存する世界で、空哉とその周りの人物たちの日常生活を書いていきたいと思っています。

日常かどうかは微妙ですが。。。

感想とかが書かれたら次行くかも。。。

対話・会話（前書き）

この物語はフィクションであり、小説内の物と現実とは何の関係もありません。

対話・会話

さて。

少し説明不足だったのだが、俺は腹が立ってなるに痛い目にあつてもらったときに、魔法を使った。

魔法といっても一種類というわけではない。確かにどれも魔法であることは変わりないのだが、違うところを挙げるなら、発動過程だろう。

大きく分けると一般魔法とそのほかの伝統魔法や我流魔法に分かれる。

今現在において最も広くつかわれ、その名のとおり一般的なのが一般魔法だ。

一般魔法を細々としたことを省いて説明すると、その魔法の名前、個法名を口に出して対象物に効果を願う。すると、対象物には口に

した個法名によって違う効果がかかるというものだ。

例えば、HOT^{ハット}という魔法がある。対象物の温度を上げる一般魔法だ。英語なのは世界共通で使えるようにするためらしい。

氷に向けてHOTと口にし、魔力を使用する。そうすれば、氷が解ける。

魔力はそのまま、MPとでもなんとも言えるが、専門用語でも魔力というのには脱力しないでもない。

魔力は見えないし、器具で計れるものでもないので感覚的に、どうということも無く使う。

そのあたりの曖昧さ、また発動過程が異なったり流派の違う魔法同士でも同じような結果が得られることなど、魔法というのはどうにも不可解だ。魔法を科学的に（この辺、笑ってもいいだろう）解明しようというお偉い学者さんたちもいないではないが、見えず分らずのものをどうやって解明するのか。というわけで、解明よりも分類、体系化のほうに力を入れている。

使う側としちゃ、使えれば何だっていいんだけど。

伝統魔法や我流魔法というのは、一般魔法に分類されない全ての魔法を総じて言う。

つまり、etcと呼ぶには大きすぎる。

一般魔法とそれ以外の魔法との差別化を図ろうとした時代もあったそうだが、今は一般魔法とそれ以外の魔法との間に壁はなく、総てを魔法と呼ぶ。

一般魔法ではその個法名を口に出して魔法を発動するが、口に出さずに魔力を使用しても、頭の中にどの魔法を発動するかをしっかりと思い浮かべていれば問題ない。口に出すのは、見る人にどの魔法を使おうとしたのかが分かるようにするのと、そうすれば成功率が少し上がるためだ。

ちなみに、口に出さずに脳に思い浮かべ、発動して効果を得る時には、無系統魔法という。

それ以外、etcと一括りにしたが、その中でも特に知られているのは、表意文字依存魔法、通称「二字魔法」だ。

これは、我流魔法に分類されながらも多くの人に知られていることも特徴だが、何よりその使う人のことも特徴だろう。

日本の魔法会——魔法競技会・魔法研究会、あとついでに魔法学会を総じていう——に幅を利かす、五色家^{いしきけ}。

蒼き空、光の陽、白の灰、緑の葉、そして——朱の浦。

青、黄、白、緑、赤といったところだ。

この五家は、魔法が確認され始めてすぐ、——2180年の前後だったか、その辺だったと思う——魔法を表意文字依存魔法として体系化し、確たる地位を築いてきた。これは、日本や中国などといった、おもに漢字のある国の言語でしか理解、指南できないこと、一般魔法が世界のどこの言語でも使えることを目的に体系化されたことの違いから、一般魔法のみが国に、世界に保護され育てられてきたことを鑑みると、驚異的なことだ。

もともと五色家はそれぞれが敵対し、競い合い、伸ばしあつた財閥、

その財力は俺のような一庶民には計り知れないし、その家々にもわからないほどだったのかもしれない。なんにせよ、その財力がこの結果を生んだということだ。

二字魔法の名からわかるように、二つの文字というのがキーだ。個法名を口に出すとき、漢字二字を口にする。それで、個法名となる。

まあ、見ればわかる。

他にもいろいろあつて、実は人の目に触れないように継承してました、というのが伝統魔法、新しく考え出されたのが我流魔法だ。俺は何種類か、できる。

……………。

自分の手の内は明かすべきじゃないだろ？

まあ、なるに使ったのは我流魔法だ。我流といって間違えないで欲しいのが、それぞれ個人で考えたものという意味では必ずしもないということ。俺は近所の道場？ 的なところで我流魔法を習った。習ったなら我流と言えないとの指摘は無用だ。世間的にみれば我流に違いない。

法名は、座標確定。

主に空気を固める、壁のように固定する効果の魔法だ。我流にも一般にも、どの魔法にでも言えることだが、口にした個法名の声の大きさによって何かが変わることはなく、小声で言っても大声で言っても何も変わらない。

人の多い中だったので小声で言った。

座標確定で、なるの左腕の前方に、針のように細く座標確定を作用させ、刺さるようにした。

……俺、ちょっとやりすぎたかも。

まあ、服にあつた違和感をすぐに察知し、歩みを止めてくれたので、服に穴が開くこともなく、無事に済んだ。

あまり口にするとなるが怒るかもしれないが、さすが朱津家といったところだ。

……今度から気をつけるか……

なるが俺を連れていったのは、少し洒落た雰囲気の喫茶店だった。

いや、なるはカフェと言っていたか。どちらにしろ俺には違いが分からない。

店名、「ルーヴ」。

そして、俺を連れてきた目的が明らかになった。

「……おい」

「ほえ？」

パフェを頬張りながら、返事をする。食べ物を口に入れたまま喋るな。

「これは詐欺とか騙しの類じゃないのか？」

俺はコーヒーしか頼まなかった。さっきも飲んだが。

「いやさー、別によくね？それと、割引なんだから詐欺じゃあねえだろ」

咀嚼し、飲み込んでから言う。

俺がなぜ怒っているかというと。

このカフェ、「ルーヴ」の店内には、満員とはいかなくても、かなりの人数が入っている。

その要因は明らか、開店記念のサービスの内容だろう。

曰く、『全メニュー5パーセント引き、ただしカップルでの来店は半額！』

……だ、そうだ。

勿論、俺となるは付き合っていない。

しかし入店直前に短く、『誤魔化して』と言われたので、そんなふりをした。

……ノリだ、ノリ。

通常、そういうことの前には説明と要請があるべきで、俺はその理

屈、手順が蔑ろなことに怒っているのだ。

半額なのは悪いことではないので、そちらには怒っていないが。

「いーじゃねえか、半額がいいことだぞ？そう怒るな怒るな」

そういつて、笑顔でパフェを攻略していく、なる。

……もう、どうでもよくなってきた……。

一度も手を伸ばしていなかったコーヒーに口をつける。

問題なく、苦い。

「で、暇だ。なんか話せ」

「暇って、おまえな。そういえば、入学式って、いつだったけ？」

そう。俺とこいつを含めた、百数名が俺の入る高校に入学する。

「いつって、空哉、明日だぞ？」

呆れた顔で言われた。そんな顔をされても、今までにもあったことなので今さら驚いているわけではないだろう。普通に呆れられた。

「まさか何も準備してないとか言うなよ？」

「それこそまさか。準備は全部してあるからいつでも困らない」

見れば、なるのパフェがもうほぼ空になっている。だから暇なのか。

「空哉は入学祝いに何かもらったり、したか？」

「いや、なにも。逆に、中学から高校に入ること何故そんなに祝う必要があるのか、むしろそっちのほうが疑問だ」

「おいおい……まあ、なに考えようが勝手だけど、せめて喜んどけよ」

「何故」

「いや、何故って。俺たちが入るのは私立榆宮高等学校だろ。結構な難関なんだから、喜ぶふりだけでもしないと落ちた奴らに悪いだろうが」

俺たちが入るのは私立榆宮、この辺りでは一番入学が難しいところだといわれる。だが超難関というわけでもなく、他の高校より望ましいとされる点数が少し高い、その程度のレベル。少し難しい、比べればこの辺で一番になる、それだけだ。

「喜ぶ喜ばないに関わらず、悪いというなら落ちたほうだろ。受か

って何が悪い」

「理屈屋の自信家の現実家め」

「理屈屋は否定しない、自信家という自覚はない、そして現実家とはなんだ」

「リアリスト」

「否定も肯定もめんどくさい」

どれも的を射ていないと思うのだが。

「話を戻して、お前は何か買ってもらったのか？」

「ああ。新しい指輪を買ってもらった」

そう言って中指の指輪を示す。申し訳程度の赤い宝石が付いているのが見える。また笑顔なのが憎い。

「結局自慢したいだけか」

「自覚はないが」

「嘯くのは肯定と受け取る」

指輪。

俺の髪が数本やられた時に見たはずだが、気付かなかった。どころか、今の今まで見ていたはずなのだが。

「サツシのたてつけが悪い奴だな」

「察しが悪いと言いたいのをおそらく故意に間違えてくれたところ悪いが、その言い方も正しくないと思う」

ただ単に俺が視界の中のをよく見ていないだけだ。
で、指輪というのは。

婚約指輪や結婚指輪は古来からのもので現在もその風習は失われていないが、現代では、別の理由を持ち、指輪というものが着用されることがある。

なるの指の宝石は、普通の石ではない。
魔導石という。

宝石のようなものから落ちているような石ころまで、様々な外見がある石。

字から予想される通り、魔法に関係している。

魔法の効果を大きいものにする、というのが主な用途だ。

基本的に、魔法目的の場合は蒔蒔…ではなく婚約指輪のように、その着用する人の指にぴったりはまるようには作られない。肌身離さず着けている必要もなく、取り外すこともよくある。また、用途によつて付け替えさえもする。

その指輪は、着けていても現代では（昔はそうではなかったらしいが）目立つことはない。着けている人間は多いし、異端視する方が異端だろう。

ついでに言うと、製造法は企業秘密、というか国家機密だ。製造した国によつて見た目が違う、というのが常識で、例えば日本は宝石似、ドイツは花崗岩っぽい。（いちいち覚えていないので曖昧だ）勿論、国家機密とはいえ一つの技術なので、覆る可能性もある。

ちなみに、着ける指はどれでもいいが、なるの使う魔法、二字魔法では効果を強くしたい魔法の系統（火とか水とかそーゆーの）を表す漢字の画数と指に対応させる。親指を1、小指を5とし、例えば画数が4なら薬指、13なら中指だ。

そついった使用する魔法の種類とは違い、目的とする効果によつて魔導石の色を選ぶ風潮もある。火なら赤、水なら青のように。

なるの文字は、『炎』。

画数8。

高校入学に祝うだけの価値があるのかが甚だ疑問ではあるが、無償で物をもらえるだけの価値はあると、なるの両親は判断したのだから。

「……じゃあ、前のは？」

「前の、って？」

鸚鵡返しで尋ね返してきた。言葉が足りなかったか？

「その前に着けていたのはどうしたんだ？ 捨てたか？」

「そんな勿体ない事するわけないだろうが。作ってくれた人のことを考える」

怒られてしまった。親の教育方針の違いだろう。

「親戚にあげた。お下がりで悪いが、我慢して使ってもらうことになるんだろうな。つーかあれ、俺もお下がりだったし」

「へえ」

それは知らなかった。ならば、新しく買ってもらう喜びは通常のそれより大きいんだろうなあ、と思いながらコーヒーをすすする。

「んー、PMPしねえ？」

「悪いが持つてきてない」

PMPは、ポータブル・ミニ・プチの略、だ。名付けた製造会社の人のネーミングセンスを疑う名前だ。小さいことをアピールしたいのは分かるが。

言うまでもなく商品の名前を同行できる権限などを持っているはずもないのでどうでも良く意味もない話。

メタに言えば、アイポッドクラシックと同じようなものだ。デザインも似ている。

勿論、機能は段違いの桁違いだが。

「そっか。俺も持つてきてねえ」

「なら言うなよ！」

こんな感じで会話をしつつ、適当に時間を過ごしていった。半額目当てで来たならもつと頼めよ、と言いたいが。

仮に未来から過去の俺に言葉を伝えられるとして、俺は実際にそれをしようと思うことは無いとほぼ言い切れるが、何か伝えなければならぬとすれば俺はこれを言うだろう。

壁に耳あり障子に目あり。

この街は意外に狭いんじゃないかと思わせる出来事が後に起こるのだが、そんなタイムマシンみたいなことは実際にはできず、その時の俺は勿論何も分からず、対話に興じていたのだった。

対話・会話（後書き）

感想書かれてないのに次行っちゃいました。。。

入学式の日

入学式。

それが今ここにいる百数名の入学生にとって、個人によりいろいろな感情を抱かせているものであることは俺のような聡明とは程遠い人間にも予想はつくが、しかしそれにしたって俺のこの無感動というか無感想はさすがに常人とは離れてやしないかと思うほどの無感情でここ、私立榆宮高等学校にわざわざ設置された鉄パイプの椅子に俺は座っているのだった。

いや、無感情ではないか。

面倒くさい。

入学式なんてせずに合格通知だけくれれば制服を着て出向いてやるのに。クラス分けをそう楽しみにするタイプの人間でもないのだからで十分だ。

と、そんなことをうたうだと、考えている。

視界の隅に映る金髪が鮮やかだ。

当の金髪さんはのしかかるまぶたの重みと戦っているが。

二十世紀の現代、外国籍の人々も日本に定住する人は多い。

その目的の多くとしては、日本の優れた工業技術（大企業も多いが、中小企業や、所謂町工場の繊細な技術を目的とするのも多い）を学びに、またはそこで働きに、ということも大きな理由だが、もうひとつ、大きな理由がある。

魔法関連で見た、生活環境の良さだ。

魔法を使うことで迫害されるような国は今は無いにせよ、そのような事実のあった地域というのは確実に存在しているわけで、そのような地域ではあまり露骨ではないがそういった空気があるものだ。逃げ、ということと不謹慎だろう。

それとは別に、魔法途上国においてあまりにも優秀な魔法使いであるので、それを公式に認められて、それを伸ばすために留学、転住

する例もある。

優秀ならば、魔法途上国でなくても個人的な思いでもっと環境の良い国へ転住するパターンは多い。

野球などで強化合宿に行くのと、意味的には似たようなものだ。

これらのことからわかるように、日本は世界の中でもかなり魔法関連から見た生活環境が良い国として見られている。確かに、各国の魔導石は手に入るし、迫害もないし、魔法関連の仕事もあるし、あと国色の強い魔法もあるし(？)、恵まれているんだろうが、海外へ出たことが無いから曖昧にしか分からない。きっと二十一世紀もこんな理由で、恵まれていると意識できなかったのだろう。

しかしこの金髪少年、結構整った顔立ちをしている。が、とてつもなく眠そうなので残念だ。

日本にいる理由は知る由もないが、それを話題に話しかけてみるのも悪くないと思った。

私立榆宮高等学校、略して榆高。

その新一年生は百数人だったが、その数人が思い出せない。思い出せないが、クラスは振り分けられた。

一組から五組まで、五つのクラスに分けられ、俺は三組となった。

そして今、俺は腐れ縁というものの強さを実感している。

隣に、どこの国の言語か分からない言葉を喚きながらはしゃぎ回るなるがいる。

幸か不幸か、俺となるはクラスが一緒になった。これで、えーと…
…通算8回、五連続で一緒になった訳だ。

幸でも不幸でもかまわないが。それでクラスを変えてくれるわけでもなし。

ただ、ここまでくると、五連続というか誤連続じゃないかと思う。
まあ、中学での教師側の意図は分かっていた。常に爆発している爆

弾のようなこれ（・・・）の鞘になれたのは、俺の知るところでは俺しかない。

誇らしくも何ともないが。

しかし8回目の一緒のクラス、俺はげんなりというかはんなりというか、既視感を伴う倦怠感？ を覚えていた。

「……………おお」

振り分けられた三組に行ったら、もう自己紹介やそれに類するものを繰り返している光景が目に入った。よく見ると、中学で一緒だった奴もいる。いや、それは当たり前だろうか。当たり前かもしれないが、誰がどの高校に行くかの、志望校が何処だの、そんな話は耳に入れていなかった。

別段仲の良かった奴でもないので自分から話しかけはしない。

自分の席を見つけて、背負っていた鞆を降ろす。

「おーい、空哉、こっち来い！」

この初日にこんな呼び方をする奴は声のするほうを振り向くまでもなく、なるだ（断言）。

そして振り向くと、やはりなるだった。

教室に入って早々声をかけたのか、既に女子数人の真ん中にいる。

そこから大きな声で呼ばれると恥ずい。なんか既視感、既聴感。無視したらどうなるのだろうか。ちよつと試してみたくなった。

向けた顔を戻してみる。

一秒。

三秒。プレッシャー。

牛蒡。噛んだ。脳内で噛んだ奴なんて俺が初めてだろう。

七びよ…………

「くおら空哉！！ こっち向け！」
切れた。

切れるポイントが何処か、長年の疑問だったが、この辺りなのだろうか。

これはクラス中の注目を集めてしまっている。
もう振りむ……

「怒るぞ空哉！この……」

炎・爆！！！」

なるが左手をこちらに向け、大声で言った。

その語感とは逆に、クラスの雰囲気は凍りついた。

皆々様方既にお分かりなことだが、今のが二字魔法である。

一文字目で系統、二文字目で作用を表し、法名を固定・確定する。

この法名は付き合いの長い俺もなるの口から聞いたことがなかったので、最近習得したのだらう。

じゃあ、誰の口から聞いたことがあるのか。

誰といって、炎を一字、爆を二字とする魔法を使うのは五色家が一、朱浦、そしてこれはその中でも実力のある者だけが教えられる精髓中の精髓。この辺りなら、テレビを見ていれば難なく分かる範囲。分家でも教えてもらえる、と新たに情報をいれておく。

魔法とは、法名を口に出せば良いって物じゃない。

師とする人物から教えを受け、何度も何度も繰り返し唱え、感覚を掴み、自分のものにしていく。

魔法とは言いつつも、剣道や柔道などの技に似ているところがあるのだ。

……と、なぜ俺が無事にこんな解説をしているかという、イマドキ今時の

教室の造りの所為だ。

魔断石。

その性質は魔導石とは逆、いや魔法に関係があるから全くの逆とは視点により言い切れないが、魔法のことを視界に入れて話すならそれはもう、真逆である。

簡単に字から予想がつくが、魔法の効果を発動させない石、だ。

たとえば、魔断石を八個準備する。それで小さくとも立方体なり直方体なり、立体的に配置する。

すると、その中において魔法の効果は発動しない。

魔断石は魔導石と違い、多種類は無い。どこの国で作っても同じように見える。純度の差や大きさなどもあるが、それは実際に売買・設置する人の都合であり、何も知らなくても何ら支障は無い。

そして、その魔断石が全教室に設置されている。

魔法が発動しないのが道理なのだ。

しかし、この教室ほどの大きさとなると、設置費用が大変だ、などと考える。

そんなことでも考えないと間が持てないほど、空気が凍り付いていた。

……状況説明。

俺：なるの方を向いている

教室の全生徒：なるの方を向いて固まっている

なる：周りの雰囲気で動けない

その周りの女子：身を引いて固まっている

周りの女子のなるを見る視線には畏怖の色が混じっている。

女子のことだから指輪のことはまず真っ先に訊くことだろう。それで二字魔法を使うと分かっても、こうまで恐れることは無い筈だ。

だが、この状況では畏怖を加速させていた。
様になっていた詠唱もさらに加わる。

苗字を見て直ぐにそれと察することができるとは思いにくいが、そのような雰囲気だけでも感じ取ったのだろう。

よく見渡すと、なるがメドウーサのように見えなくも無い。

「なる、ちよつと外出ようぜ」

なら、俺がヘラクレスか？

そう思つて教室を少し抜けた。

「なあ……」

「……………」

ここは、廊下の突き当たりにあつた図書館。その棚に凭れて話しかける。

なるの顔は悲壮そのものだ。

または絶望か。

無理も無い。

その家柄だけで疎外された過去のあるなるが、高校コウでもまた疎外されるかも知れないのだ。

その過去は小学生のときのことだつたとはいえ、またそれが直ぐに解決されたものであるとはいへ、過去は過去。

辛いかもしれない。

自分でない者の気持ちなんて、危険級魔法でも使わなければ分からない。

だから、予想しかできない。

「悪かつた。元はといえば、俺があんなことしなければ良かった。本当に——」

「いや、いいんだ」

なるは、不確かな予想の上に立つ俺の言葉を割るように、裂くように、断つように、遮つた。

「俺が、短気だから……冷静さの欠片かけらも無かつた、俺が悪かつた……」

…」

もう、諦めたと言わんばかりの顔で。

「いつも暴走して、いつも空哉にはめいわくかけてるし、本当にもう――」

「なる」

「は？」

ゆっくりと顔を上げる、なる。

その顔に、左手中指の指輪を見せる。

緑の宝石が光る。治癒の癒。俺の魔法は二字魔法ではないが、それでも中指につけている、この指輪。中指につけている理由は画数だけではない。

「なあ、知ってるか？ 赤の補色、つまり反対の色は緑なんだ。」俺の言葉に反応して、視線が力を持つ。

「なるが迷惑をかけようが何しようが、対になってるんだよ。」

心配するな、助けてやるし補ってやるし繕ってやる。何年来の付き合いだと思ってるんだ？」

頼りにされるような言葉でもないのに。

「……悪かった。そうだな。遠慮なく頼らせてもらっ頼りにしてくれた。」

「……何を今更。それに、今までも、こんなことの後でも友達なんか簡単に作れただろ。そんなに落ち込むな。戻るぞ」

「ああ」

それで、教室に戻る。

実を言うと、魔断石が効果を發揮しているのは教室内だけで、ここでの空気を払拭するために転ばすとか魔法でちょっとそんなことをやってみたくなったが、さっきのこともあるのでやめた。それこそ魔法で、こんなところで痛い、もしくは熱い目に合うのは嫌だし、最悪廊下をぶっ飛ばされる可能性もあるので。

まあ、それを全部抑えての、この俺なのだが。

「あと空哉、赤の反対は緑だがお前は白だろう。まあ縁起が良いけ

どな」

「それを言うな。この読み方はシロじゃなくてツクモだ。百から一とって九十九だ」

「駄洒落かよ」

「俺に言うな！ あとこのやり取り、最近してなかったな！」

苗字のからかいあい。

小学生のレベルだ。

そのあと、俺らがいなくなって弛緩していた教室内はまた少し緊張が戻り、探るような視線も少し飛び交ったものの、俺となると、あと一人で座っていて誰とも会話ができていなかった男子を一人、そしてさっきなるの周りにいた女子たちを合わせて自己紹介などをしたら、緊張感やそれに似た小さな恐怖感も薄れ、自然な会話ができるようにになった。まだ言動の端々にその残滓は見えるものの、それはこれからの生活で消えていくだろう。これで、このクラス全体にも同じようになっていく筈だ。

なるの周りにいた女子は全員なるとは初対面、というわけでもなかったらしい。

一人、中学から一緒だった子がいた。当然、なると一緒なら俺とも一緒なわけで、顔を見たがあまり覚えていなかった。ああ、学年の中にはいたっけか。その程度にしか覚えていない子だった。

そんな子も含めて、会話をしていたら教員が来ていると配られたりした。

前途多難な高校生活になるんじゃないかと、高校入学式・初日から思った日だった。

衝撃な新聞と衝撃な魔法と衝撃でない俺

23世紀になっても、相も変わらず新聞は最大の情報伝達手段のまだ。

いくつかの新聞社は時代に淘汰され消えていったが、それでも21世紀にあった新聞社はほとんどが残っている。

そんな新聞に、衝撃的なニュースが載ることは珍しくも何ともない。だが、さすがに今日のこれは衝撃的過ぎた。

『魔法オリンピック日本代表選手殺害』

魔法オリンピックは魔法が肯定されてから考え出されたオリンピックの一種で、魔法を使った独自競技やオリンピック競技を魔法によって発展させた進化的な競技もある。それで、その歴史は比べたら馬鹿馬鹿しく思えるほどに違いがあるが、何しろ魔法だから、その注目度や熱中度などは本来のオリンピックに負けず劣らない。その魔法オリンピックの中では、新しく考え出された独自競技の方が本来の競技の発展形となっている進化競技より、どちらかと言うと人氣が高い。

この殺された選手は若い選手で、しかし才能を漲らせていた。その若さによる経験不足で二年前の2220年に開催されたオリンピックでは、初出場ながらも四位、メダルには一歩及ばなかったが、その経験不足を才能で補ってのこの結果である。次回の大会には金メダルは確実と既に囁かれていた。

その選手がこれである。

日本代表の『選手』といっても、それは魔法が使える『戦士』でもあるともいえる。その選手がなぜ、という思い、また殺される理由

など、謎の多い事件だった。

おいおい、と思う。

実際のところを言うと、誰がどのように殺されようが、俺は興味が無い。身内や親しい人で無い限りは。

しかし、日本代表という有名人が殺されたとなると、関係の無い人々にも話は伝わる。そして影響するから嫌なのだ。

新聞や他のメディアでも報道されている、このニュース。

一番考えやすいのは日本にメダルを取られまいとして外国の人が殺したという説。

しかしこれでは国籍さえも特定できないし、そんな動機で殺人に走るというのも信じがたい。いや、常識の話で、実際にはそんな人もいるのかもしれないが。

結局よく分からない、というのが半ばこの事件の結論と化し、また日本を覆う空気を一番よく表す言葉だ。

高校入学から数日がたった。

思い描いていた高校像とかけ離れていることも無く、しかしそのままであるということも無く、結構面白いと感じられた。

入学式で見た金髪さんが、隣のクラスにいることも分かった。名字は世田谷というらしい。純外国人（？）というわけではなさそうだ。口伝いに聞いたことなので、こちらが一方的に知っているだけで、あちらに俺の情報が届いていることは無いだろう。なので、不平等さを自分への言い訳に、今度自己紹介などしにいくことを決めている。

ところがそれが皆の口に乗っていたのはこの事件の前までで（確か

にこれは噂にはなる存在なので、やはり（なると）教室へ入ってみると昨日までは会話などする関係ではなかったはずの人たちも、あたかも旧知のようにこの事件について話し合っていた。

俺は中学校では、家も近いのでほぼ毎日なると登校していたのだが、高校入学を機に別々に登校するようにしようかと思っていた。しかしそんなことをなると言ったら、曰く、

「ふざけんなこの薄情が！」

だそうだ。

何処が薄情なのだろうか、何が薄情なのだろうか、この場合は的外れを越してもはや考え無しではないかと思っただが、その表情が意外に真剣だったのでとりあえず現状維持を約束しておいた。

顔も赤かったが、朝から顔色がいいのは悪いことではないのでそのことは触れなかった。

そのあと、歩きながらなるとこの事件について話をした。なるは新聞を読む人間ではないと分かった。事件を知らなかったからだ。

朝の時間の幾らかはそういうことではなく魔法の鍛錬に費やしているらしい。事件については歩きながら説明した。

1〜2時間を鍛錬と、決めているそうだが（師範は緋夜父。ほかに一緒に習っているのが数人らしい）そんなにして魔力の枯渇はないのかと不安になって訊ねたら『この程度問題ない』とのことだった。

さすが朱浦に繋がる家柄、血筋だといったくなるが、なるはそういった家絡みのことが嫌いなのでそんなことは口に出して言わない。鞆を片付けると、なると一緒に校舎裏の魔法実習用コートに行った。初日のあれ（・・・）の発端というか原因になった魔法を悪いが見せてもらうために。

なるが新しい魔法を習得したときに、俺に披露するかのように見せてきたことがあった。魔法を習得したことが嬉しいのか、嬉々とし

た表情で。数週間は目に焼きついて離れないほどのものすごい笑顔だったことを覚えている。

そのことをきっかけに、俺はなるが新しい魔法を習得したときに見せてもらうようにしている。必ずしもなるのほうからではなく、今は俺がそのことに気付いてからなるに頼むことがほとんどだ。

興味本位で頼んでいるわけでもなく、もちろん理由もあるのだが、それは誰にも言ったことの無い秘密だ。知られば、たいしたこと無い反応で終われば良いが、もし広まるとかなりやばい。もしかしたら、の話でしかないが、最悪、国家の威信に関わらないとも限らないと俺は考える。

校舎裏。

裏だが、その特性上校舎からすこし離れているので、暗いということも無く、普通の校庭のような印象を受けた。

ぱつと見では、2×5の10オール程（なるに普通はぱつと見で測るものじゃないと言われた）、真ん中で区切られている。

教師に立ち入るなともいわれていないし、魔法を使う部活で使用することもあるようだ、今は先輩というような人もいない。コート上に二人がいるのみだった。

敷かれているのは普通の土、よくある運動場のような土だった。授業で使う方の校庭と同じだ。

隅のほうに土が盛られているのが見える。恐らく、魔法で土を掘り返してしまったときなどにあの土を使うのだろう。スコップは無いので学校のを借りてくるのか、いや、そんなことはせずに、手っ取り早く魔法を使ってしまふのかもしれない。

「空哉、ちよつと離れてる。というかかなり離れてる」

なるに言われて2、3歩下がる。なるは真ん中の辺りまで進んだ。そこでふりむいて、

「うーん、まだ危ないかもな。もっと下がれ」

まだ下がるのか。これで俺となるの間は10mは開いているのだが。「まだ下がるのか？」

「ああ。使えるっただけで、最近までは全くだった魔法だ、コントロールに自信が無い」

というわけで最大限後ろにさがった。

コートから出てしまった。

「もういいだろー？」

これで15メートル弱、開いた。少し声を張ったのは、距離の開きがもう普通の声の大きさで届く程度ではなくなったからだ。

「ああ、十分だと思う。じゃあ準備は良いか？」

「何の準備だ？」

「心の、だよ。じゃあ、いくぞ……」

そう言っただけで中指の魔導石の指輪を外す。

その手を伸ばして、声を出した。

「炎・爆！」

俺の前方5メートル位の地点で、緋の花が咲く。

そこで手榴弾が爆発する様子を見せられたという方が納得がいく様な、爆発だった。

何も無いところから炎が生じ、球のようにまとまりつつも、竜のようにつねる。

本当の手榴弾みたいに、爆発は長く続かない。しかしそれこそ本当のように爆音も轟いた。

実際に朱浦の当主が実演した映像を見たことがあるが、それと比べて、日が浅いことを鑑みても見事というべきな、「炎爆」だった。この魔法のおかげで、寒かった空気が暖かくなった。

「おい、大丈夫か!？」

なるの声が聞こえたので顔を上げる。顔を見ると、不安の色が見てとれた。おそらく、俺の姿とあの炎がかぶって見えたのだろう。

俺の場所とは離れていたからよかったが、あと1メートルでも近かったら火傷は免れなかっただろう。火傷は俺の使える治癒魔法の範疇に無い。

「ああ、大丈夫だ。教室に戻ろうぜ。もうチャイムが鳴る」

「ああ」

こいつには何も言わず、ただ頼んでやって見せてもらっている。小学校からの付き合いなのに、なぜ、などと訊いてきたことは一度として無い。

踏み込んでほしくないところは分かってくれているのか。それならば、本当にありがたいことだった。

始まったばかりの高校の生活に今のところ不満は無いが、ただ日々の授業が学級活動や、オリエンテーションばかりなのはどうかしてほしい。

……それも時間の問題だろうが。

俺のクラスの担任は、若い女教師になった。押しに弱そう、流されやすそうな印象なので、やりやすそうだと思った。とりあえず一年は安泰そうだ。

この高校は、魔法高校ではない。そういったことを目的とするのではなく、どれもまんべんなくやっておくのが方針らしい。農工業高校などと違い、一つに特化しないので、求められる成績も低くない。この高校がこの大きくも無い地域において他の高校と比べ、求める成績が高く、受験でも高い点数を求めるのはそれが理由だ。

魔法も授業の一つに数えられる。これは中学までは無く、高校から追加されることだ。

しかしその内容に実践は無く、基本的な知識や特に有名な魔法（また、悪名高い魔法も）を習う。知識として、だ。

これは、魔法にさまざまな流派があるせいだ。最も多くの人が使用

するのは一般魔法だが、ほとんど、というわけではない。全てを比べたときに、その中で一番多いだけ、統計にすれば三分の一から四分の一だ。

どんな流派でも鍛錬を積み重なれば誰でもかなりのところまでいけるが、個人によって合う流派、合わない流派があるとも言われる。そして、基本的に、一人は一つの流派しか身につけられない。基本的に。

そんなわけで、魔法を実際に指導することは不可能なのだ。生徒全員の流派の師範を招く事など不可能だし、仮にそんなことができたとしても予算的な問題があるし、他の高校も同じようにしなければならぬので、指導員のタイムスケジュールも組めない。

それに、日常で魔法を使うシーンなど度々あるものでもない。日常で使う魔法は日常で身につけるので習う必要も無い。

それに、学校で習うことで、その後の人生に役に立つものはほとんど無い。

何を習おうが、関係ないしどうでもいいと言える俺は正常といえるのだろうか。

答えるものはいない。こんな問いこそが、関係無いしどうでもいい。

衝撃な新聞と衝撃な魔法と衝撃でない俺（後書き）

空哉って意外と高校生的な精神してるんですよ？それでも

友好条約、裏に脅迫（前書き）

友好条約、裏に脅迫

善や悪などと言うものは、それがどれだけの人々に認識されていようとも、またされていたとしても、それが確実な、確たるものになることは決してない。なぜなら、正義だ悪だと言うものは、詰まるところ口にする側の都合のいいイメージでしかないからだ。

正義のヒーロー——大衆の模範。

物語の様な悪役——嫌悪の対象。

戦争の兵器——手足の延長。

けれど、例えば銃のように、使う側によって正義にも悪にもなりえるものだってある。

警官が使うか、犯人が使うか。

けれど、その犯人が胸に抱く思いが、正義といって差し支えないものである可能性もある。

そして、正義の体現のような警官も、その関心は出世や賄賂に向けられているかもしれない。

大きく言えば、太平洋戦争の終わりを告げた大鐘、原爆も、日本で大量殺戮の兵器といわれようが、米国では戦争を終わらせた正義と言われる、そんな事も事実。

つまりは、人々による認識。

環太平洋戦略的経済連携協定が農にとっての悪ならば、工にとっての良でもある。

糖分が脳の栄養になれば、虫歯の元にもなる。

認識であり、視点。

しかし、裏を返せば、認識がなければ、すべてのものは正義にも悪にもなりえない。そして、認識も人間の意識でしかない。

つまり、正義も悪も、確たるものとして存在しないのだ。

^{かなめ}要は、認識。それも、知る者にしか分らない。

その、知る者は、己を、己のしたことを、何だと思っているのか。

正義か、

悪か。

近くの運動場。

といってもその名の程に運動する人々はおらず、整備もされていない。

自転車で（俺の家から）3分としない。川を横に位置する、大きめの運動場。

河原と隣接していて、河原も含めて運動場の様になっている。堰を越えれば石だらけ。

この運動場、かなり昔から使っているのだが、正式名称を聞いたことがない。まあ、聞かなくても何も困らない。

その、河原。

川に向かって、個法名を口にし続ける俺がいる。

「炎・爆！」

……人に見られたら、または人に聞かれたら、大変なことになる光景だ。（やましいところは全くないが）二字魔法に限らず、魔法の鍛錬は室内で行うものだ……からではなく。

世間的に、二字魔法は異質なものとして見られている面がある。ジ

ョギング中の近所の爺さん（山田さんという）にでも見つければ、

『魔法の鍛錬か、感心感心』では済まない。

やばいっっちゃやばいけど、でも、誰かに見つかったことはない。

つまり見つかる確率は、それまでを考えると0。

だから心配なく練習していたのだが、しかし世の中確率で考えていいことと悪いことがあることを知る。

「その後ろ姿は……空、哉？」

心臓が止まるか爆発するかと思った。真逆なことにも思えるが、どう表現するにしろ、心中は焦りに焦っている。

恐る恐る振り向くと、その頭の高髪が視界から強く主張する。というか、朝日を浴びて少し反射する光が、今の俺にとって恐怖の対象に映る。

やばい。

ちよーやばい。

精神干渉なんて高度な魔法は俺使えないしいや本当にそうだったっけというかそもそも精神干渉系魔法はほぼすべて危険級魔法だし俺が使える危険級魔法は3ついや4つでその中に精神干渉はないから記憶は飛ばせられないしでも強く殴れば記憶は飛ぶって言うよ？

そんな焦りに焦った思考。

「空哉？ どうしたの？」

その思考の迷路に陥らせた本人が訊く。

長らく金髪さんと呼んだままで申し訳ないが、彼の名前は世田谷・L・レオンだ。祖母が英国人のクウォーターで、髪の色は隔世遺伝昨日、いや一昨日だったか、とにかくそのどちらかの日に、自己紹介というかそれに似たようなものをしにいった。俺一人で行くと変な奴だと思われるような気がしたし、近くの席の奴が数人で話してみようと、その数人としておれも数えられたので都合よく入らせてもらった。

俺はこの金髪さんことレオンを見て顔を覚え（髪さえ見ればよいことだが）、少し話が出来れば十分だったので、名前は覚えられていても、話しかけられるほど仲を良くしたつもりはない。

そのレオンがこのように話しかけて来たということは、あちらさんの中では既に仲がよいものとして分類カテゴリーされているのだろう。

まあ、相手のことなどどうでも良い。

問題は、していることを見られたかだが――

「ああ、魔法の練習中にいきなりゴメン。空哉の使うのって二字魔法なんだね。この前は言ってくれなかったけど」

地獄に落とされた。

このままでは、学校の奴らに知れる↓距離をとられる↓社会的に死ぬ。

どうにかして、口に釘を。

「そ、そうなんだがその、」

「さっきのつてかなり難しい魔法じゃなかったっけ？ ああ、その前に空哉は五色家と関係あるのかな？」

「……、それが、」

「でも、なるちゃんのほうは苗字で納得いくけど、空哉はそうじゃないって事？」

こいつはもうなると仲いいのか。

何なんだレオン。

「事情があつて言えないんだ、悪い」

噛みつつだったが、やっとしゃべることが出来た。

レオンのマシンガントークのせい。

「ふ〜ん？」

レオンが下手な言い訳をする子供を見るような目で俺を見る。

俺は何も悪くない！

「じゃあ、ぼくと仲良くして？」

「は？」

いきなり何を……

というか、さっきから変人奇人の類にしか見えないぞ、こいつ。

我が道を行く、って感じ。

「最初は少し強引なくらいがいいんだよね、仲良くなるためには。なんか、二字魔法のこととか、言っただけで欲しくないみたいな感じがするし」

ただの脅迫じゃねえか。

「というわけで。今日の今朝の今から僕と空哉は仲のいい友達！ちゃんと仲良くしてくれないと、」

「分かった分かりました！ 仲良くするから！」

「うん、よろしい。あはは」

理解したくもないが、こいつは、レオンという奴はかなり気をつけたほうがいいってことが分かった。

多分、俺から見たらこいつは悪の側にしか見えないが、自身では正義なのかもしれない。

とりあえず、これ以上の弱みを握られないように、空哉は、気をつけて接していくことを肝に銘じた。

友好条約、裏に脅迫（後書き）

レオンって、性格悪いですね……これから悪くしていきますw

誤解・難解？（前書き）

三
日
坊
主
な
中
二
病
患
者
の
小
説
で
す
が、
平
に
ご
容
赦
い
た
だ
き
た
く
・
・
・

誤解・難解？

クラスの男子に聞いてみたところ。

「レオンって、中学から結構羽目外してたって言うか」

「かなりとんがってたっつーか」

「ちよつと危ない奴だった」

……らしい。

ちなみに順に、相田君と飯田君と上田君。

曰く、他の中学の生徒と、時には高校生とも、乱闘騒ぎがあつたらしい。

曰く、土日の趣味は狙撃の練習、父親が趣味らしい。（自慢）

曰く、ちよつとカッコいいところがあるので泣かせた女子多数。

曰く、中学、いや小学生のときから既に教師に刃向かう癖があつた。

（言い負かしたこともあるらしい）

曰く………

よく分かった。

よく分かった、あのレオンという奴が。

そのあと、彼らに『目をつけられた』的なニュアンスであることを話したら、同情する、可哀想に思う、と声が聞こえてきそうな顔で見られた。

自分で自分を可哀想に思えてくる……

そんな奴だと分かってても、仲良くしないわけにはいかない。あのことがあるので。

『仲良くなる最初は少し強引なくらいがいいんだ』みたいな事を言っていたが。

悔しくもその通りだというわけか。

恨めしげに右の前方の席を見るが、もちろん反応はない。

視線だけで振り向いたら、そりゃ超能力者が何かだろ。

魔法は超能力ではない。

「つまり、この魔法が広く認知されることによって……」

若い女の教師がさつきから一人でしゃべっている。

魔法の授業は高校から、つまりこの一年が魔法の授業の最初の年となるわけだが、それ故に知っていること、分かっていることが多すぎて飽きる。

もともと授業など真剣に聞く気はないが。

授業は五十分、その間ずっとただ話を聞いているというのは暇で仕方ない。

周りを見てみると、時々こつくりと頭を規則的に動かしているもの、既に脱落している者など。一心にノートをとる者もいた。今日はノートをとらなくて良いと、最初に言われたのが分からなかったのだろうか。

しかし、暇だ。

この教室に魔断石さえ設置されていなければ、少しは手遊びてあそびになっただかもしれないのに。ほぼカンニング防止でしか設置されない魔断石など不要ではないか。

仕方なく空想で魔法を使ってみる。

座標確定で中が空洞の箱を組む。中で炎焼えんしょうを使う。

炎・焼は、最もスタンダードな二字魔法の一つ。このあたり、スタンダードスタンダードよく使われる、という意味でない。

まあ、放火には便利だろうか。

炎爆では座標確定で作った箱の方が持たない。

座標確定など、何かに作用する魔法は行使した術者の力量にもよるが、耐久力がある。

よくある話では、座標確定とよく似ている一般魔法、「Air's rock」、エアーズ・ロック。

いくつかの流派の内で似通ったところのある魔法があるのは不思議

ではない。むしろ常識だ。

エアーズ・ロックスは、空気を軽い（そりゃそうだ、空気なんだから）ブロックとして組む、固体化する魔法だ。それが下手な場合、数キロのものを載せただけで魔法は無効化し。上手ければ数百キロまでの重さも耐えられる。

参考までに、現在の世界記録は一万五千五百キログラム。

魔法の強大さ、国力ともいえる大きな力が浮き彫りになった記録として騒がれたのが記憶に新しい。

もちろん、本当の国力に関わるような魔法を使える人たちはそのような記録など余裕で破るだろうが。

魔法併用型戦闘機・戦闘ヘリも開発され、実際に一線に配備されてから日も経つが、戦闘機を魔法で運ぶ映像も公開されているので、それを超える重さの戦闘機ももちろん魔法を使って運ばれることがあるはずで、戦闘機はそれより重いだろう。

魔法併用とは言っても、構造的に深いところには魔法は使われていない。戦闘時に魔法を併用して戦う、それだけのことだ。

……それだけで済むわけがないが。

『魔法』という要素が加わったことで、国防に大きな変化があった。空中戦は対魔法戦という一分野も確立され、また光の屈折を変化させる魔法を使って海上庁は広い空間を把握することも可能になった。戦闘機での空中戦は、特に大きな変化があったものの一つ。慣性減少の魔法を使って急失速が可能になり、逆に増大の魔法を使って急加速、離陸にも変化をつけられるようになった。

ミサイルを被弾する前に後方のミサイルを墜としたり。

そのように、大きな変化があったということだ。

これは、昔の話ではない。魔法というものが認められてからの変化、たった四十年弱の間の変化。祖母や祖父の時代を考える事よりも短い。

ずれた、すごくずれた。

で、えーと、透明な箱の中は燃焼を経て気圧が下がる。

空気の膨張によって気圧を通常のようにするため、HOT^{ハット}を中の空気に使う。物を暖める魔法。

……。

結局、何がしたいのかわからなくなってしまった。

もともと何をしたいくて空想などしていたわけじゃないし、空想好きでもない。

正面の壁の時計を見る。

後少して授業が終わる時間。

机の上の物を、整える。

チャイムが鳴った。

「空哉——！昼食おうぜー！」

ああもうこいつは。

この狭い教室の中、大声出さなくていいじゃねえか、席は右に三つなんだから——じゃなくて。

恥ずいんだよ！

心なしかクラスメイトの視線も生暖かい！！

ここいらでちよっと、何か派手にかましてその視線を冷却してやるうか……

暴力的な意味ではなく、その疑いを晴らすようなことを、だ。

三限目が終わって参考書を片付けて、そして鞆から弁当を出そうかと考えているジャストなタイミングでこれだ。

そういう目で見るのが、ある意味普通なのだろうが……

午前三限、午後二限が基本的な時間割。

部活の時間を大きくとってあるが、（といってもまだ一年生は入部していないのだが）名門大学受験予定の一部の三年生は六限まで取れる。

何といっても、自由が大きく叫ばれるこの頃の世の中。

束縛という言葉を親の敵のように見るようになったこの頃の世の中

である。

何をきっかけにこのような風潮になったのかは二十、三十年前のこと、俺たちにとっては生まれる前の話だ。何も知らない。

が、聞いたことがあるのは、自主性を大切にしようという『風潮』があつたという話だ。

『風潮』で『風潮』が変わった、ということ。

何も形に残らないが、（書籍や論文のテーマなどに多少の影響はあつただろうが）しかしそれによって、長期間にわたつての緩やかなしかし確かな変革があつたのだから、とんでもなく無責任な話だ。それによる責任は、何ら負っていないけれど。

現実逃避終了。

人は未来へ踏み出さなければいけない。

「あのな、なる……」

「ん？ どした、空哉？」

こいつの顔を見ると、何か魔法でも発動しているんじゃないかと思う。それくらい、こいつには邪気というものがない。

悪意の欠片かけらもないのだ。

そんな魔法ではないことくらい、分かるが……

「あー……いや、まず弁当出せ」

「いや、今日は弁当ではなく購買だ」

この学校では、昼食は、購買か弁当かを選んで食べることとなっている。

隣の高校（名前なんていつたつて？）では弁当に統一されている。

なると俺は、弁当か購買か、その日の気分で決めているので、両方とも弁当だったり、または購買だったり、または今日のように違ったりする。

弁当は自分で作っているが、弁当が気分で作れるというのも、科学技術の発達を感じるものだ。

要は、規則性や約束は無いということ。

「そうか、なら早く買って戻って来い。話がある」

「？ わかった、急ぐ」

そう言いつつ、普通に歩いて教室の外へ出て行く。急いでねえじゃねえか。

窓側の席に、俺は座っている。

そこから右へ3つ目がなるの席。

俺の席となるの席を結んだ延長線上、教室の出口から、

「なあ空哉、今日も一緒に食べて良いか？」

という声が聞こえるのを、無視したいのをこらえて、手でOKサインを示す。

途端に、クラスメイトの視線が、気の毒そうなそれに変わる。

マジで不登校になりそう。

しつれいしまーす、という、たとえばバクテリアやカビや、脳みその無い生き物に声を出させたらこういう声になるんじゃないかと思つてしまふ、つまり、一切の悩みが無いんじゃないかと思えるくらい気楽な声が聞こえる。

レオンだ。

レオンだ。

こいつは、もはやストーカーではないかと思うくらいに、付きまとうように俺に接してくる。

その金髪は、それはもうぎらぎらと、条件反射で俺のテンションを下げさせる。

既にあきらめているが、追い払うことも考える。

だが、こいつは既になるとも仲が悪くないので、そう邪険にも扱えない。

あれをばらされることを考えると、迂闊には手を出せないのが現状、こいつだって「友達に（略）」とか言っていたが、俺にとってその情報は人質に等しく、それは確かに知られてはいけないものなのだが、レオンにその重要度は分かつてはいないはず、それを質^{しち}として、いることに疑いを抱いてはいないのだろうか。

否、重要さは知られているのか。俺にとっての、重要さ、つまり優

先度？ 見たいなのは河原でのセカンド・コンタクトで知れているなら、考えても意味は無い。

問題とすべきはレオンこいつがそれを盾に俺に何を求めようとしているのか。それじゃないか。

ただの友達付き合いを求めるためにこんなことをするだろうか。いや、こいつならするかもしれないという思いすら俺の中には芽生え始めているが。

『曰く、他の中学の生徒と……』

一つ、思いついた。

殴り込みをかける仲間でも作ろうとしているのではないか。

既に高校生なのでケンカの相手は自然と高校生になるだろうか……不意に。

気になることが一つ。

レオンの使う魔法は、何だろうか。

なるが戻ってくるまで、レオンと話をしていた。といっても、一方的にこいつがしゃべっていただけだったが。

あの時周囲から浴びた視線、あれは四重苦の彼かの人が一生浴びた視線に、勝るといわずとも比肩しうるのはないかと思われた。

視覚、聴覚、嗅覚、味覚ブラッククロバーの四重苦、ウィルタニア・レイジィ。

三重苦の女性と違うのは、喋れたということと、嗅覚、味覚。この二つがないというのは、意外と辛い事な筈。

英国人男性、イケメン。いや、イケメンはどうでも良い。（言葉とこののは継がれ、絶えないものだと思う）

障害者のための魔法使用のパラリンピック、マジックパラリンピック。彼はこの舞台の歴史を語る上で絶対に忘れてはいけない人物だ。新参の大会とあって、また障害者のためという条件のためともあって、競技人口の少なかったこの障害者のための魔法競技会

に現れた新星、超新星。

ありえないような数字を叩き出し、彼の登場前後で、競技人口は十倍近くにもなった。

視覚は、周りの物体を把握する魔法でカバーしていたらしい。

受験を終えた後なので、時事ネタにはある程度詳しい。

ちなみに、ブラックローバー四重苦という二つ名は彼のお気に入りアクセサリーに由来。今では、黒く塗られた四つ葉が彼その人を表すにまで至る。

ここまで知っておいてだが、彼の競技はなんだったか知らん。引退した選手だし。

「おーい？ 空哉？ 目ー開けたまま死んでない？」

レオンがこちらの目を覗き込む。

ただ一方的に喋っているように見えて、なかなか鋭い様だ。嬉しくもない。むしろ悲しい。

レオンの昼食は弁当のようだ。弁当箱を開けていないので、中に何が入っているかはわからない。

なるは別段急いでもなさそうに戻ってきた。

この前のように、ちよつと痛い目に遭ってもらうことが頭を過ぎ^よったが、右から左へ。

この前やめ^つて決めたんじゃない^つけ、俺。

どちらにしろ魔断石埋め込みの教室じゃあ魔法は使えないけど。

レオンが弁当箱を開ける。どうやら、戻ってくるのを待っていたようだ。

食べ方はフォーメーションA……いや、なんでもない。

俺が自分の席に座り。レオンはその前の、なるは右の椅子を引っ張^つてきて、俺の机に弁当などを置く。

向かい合^つて食べるわけだ。

「待^つててくれてサンキュ。じゃあ、手を合わせて……いただきます！」

「いただきます」

例えばどんなに嫌な奴が隣にいたとしても、忘れてはいけない、日本

の食前の挨拶。

食べ物になつてくれた生き物たちに感謝を込めて。

せめて明るく、和気隈々と。

「いや空哉、それでは『わきわいわい』になつてしまふ」

お前は心が読めるのか!?

間をおいて。

なるは牛乳と焼きそばパンを買ってきた。まあまあ、スタンダード。

レオンは、日の丸弁当。

おかずを別にして、白飯の上に紅一点。

「いや空哉、紅一点というのは葉に埋もれる柘榴ざくろをもとにした言葉だから、梅干ではないよ」

お前も心が読めるのか!?

つかレオン、意外と博識。

「お前は何の変哲もないありふれた凡庸な意外性の欠片かけらもない弁当なんだな」

「るせえ。栄養バランスは完璧だ。その点でお前の焼きそばパンをはるかに凌駕している」

「いや、お前は忘れているぞ……こちらには牛乳があることを!」

「しまった! ただの麦茶では牛乳には敵わない! だが、カルシウムをより多く摂取するためにはビタミンDが必要、俺の弁当に入っている椎茸はそのビタミンDを多く含んでいる!」

「くっ……いやまだだ、焼きそばパンは焼きそばとパン、炭水化物デュエットの二重奏! 脳には直接響く栄養源だ!」

「……二人とも、その辺でやめようよ……」

おっと。ちよつと熱くなつてしまった。なるも俺も、椅子から立ち上がってしまったている。

レオンに止められるとは、珍しい体験になつたかもしれない。

なかなか楽しかったのになあ。

なんでもないよ？　という視線を周りに向けながら椅子に体重を任せる。

しかし……

「この視線の生温いことといったら……梅雨の湿度並だな、これは」
じめじめと、じとじとと。夏の暑い日に雨が降ると、こんな感じだ
ろう。

レオンからも、それほどではないとはいえ、生暖かい目を向けられている気が。

「だって、皆、空哉となるちゃんが付き合ってるの、知ってるから」

「……………」
「は？」
「俺」

「.....は？」
（なる）

沈默。

.....○

同上。

てん、てん、てん。

え。

[illegible]

ハウリングまでもが聞こえた気がする。自分の喉のどにこんな破壊力があるとは知らなかった。

「ちよ、ま、待て！ そんな無責任なうわさを流す奴は誰だ！ つ
か、それ以前に身に覚えがねえ！」

身に覚え、のあたりでレオンが苦笑する。

「え、ちよ、いや、その、そういう、それ、その、だから、その、ああもう！」

なるは俺以上に混乱しているようだ。

二人とも立ち上がったっているが、こいつは加えて右往左往している。ちよつとしたダンスに見えなくもない。

「というか、違うんだ？」

聞いていた話と違う、というような顔で俺達を見る。

「ちげーよ！ 意味分かんねえ！」

「ああ！ 何がなにやら！」

見ると、なるの顔が赤い。こんな場合だから、当然だろう。俺だつて、鏡を見れば赤かったかもしれない。

「ふうん…… ネタは上がってるんだよ？」

鼠を前にした猫のような目。

こういうときに、こいつの性格の悪さが見える。

「カップル限定のカフェにで二人でいたり」

「半額だったから、というか俺がそう言われて連れてこられたんだ！」

「入学の日も追いかけたそうじゃん？」

「今までもあったことだ！」

「つまり、入学前から既に……」

「付き合ってたない！」

「と言ってるけど、何かコメントは？」

マイクを持ったような手を（マイクにあたる部分は空気だ）なるに向ける。

絶対こいつ楽しんでる。

そりゃ、他人から見れば楽しめる光景なんだろうが……

「え、あ、いや、特に、嘘は述べて、ない」

不自然な切り方で返答。（コメントと言うのは気に障った）

「あ、そ。あんまり面白くなかったね」

それだけ言つと、弁当の攻略に勤^{いそ}しみ始めた。

我が道に行く、というか。

これで、なるにも分かつてもらえたと思う。
こいつの性格が！
レオン

その後は、三人が三人とも一言も話すことなくおのおのの昼食を食べ終わって、何事も無かった様に昼休みの時間は終わっていった。喋ることで世界が壊れるとでも言わんばかりにそれから喋らなかつた。

部活動にまだ所属していない一年生は早く下校なので、その一年生である俺はさつさと下校した。

寝る前のこと。

あの生温い視線はそういうことだったのか……

これから、あんなことにはならないように、気をつけよう。

そつえば、なるの顔、ずっと赤かったな。

久しぶりに、親友^{なる}としてでなく、女子^{なる}として見たかもしれない。

誤解・難解？（後書き）

つか、魔法全然出てこないジャン。

国の力、魔法の力（前書き）

過度な愛国者の方は読まないでください。
読んだとしても責任は（r y

国の力、魔法の力

魔法的特性が一部の人々にしか見られないことは、魔法の研究を行う上での大きな追究点であり、また残念なことだとも思います

——日本魔法学会記者会見にて

魔法という技術が確認されてから、多くの人々がそれを手にしてきました。

この世界のほとんどを占める一般人も、その上に立つ人々も。

グレートブリテン北アイルランド連合王国、つまりイギリス。

この国は世界で一番最初に、『ある人々』に魔法的特性が見られることを判明させた国である。（ただ一番早かったというだけで、どちらにしろそれは世界に知られることとなっただろうが）

その『ある人々』とは、王室にある人。

それが皇室だったり王族だったりするが、その血統を元に長く一国の上に立ち続けてきたという点では同じである。

つまり、その要は『血統』なのである。

アメリカの大統領には魔法的特性は見られない。日本の総理大臣にしてもそう。

イギリスの王室にある人に見られる特性は、魔法の技術の驚異的な成長速度。

イギリス皇太子が半年で五年の鍛練を重ねた魔法技術者（魔法を使

うことを職業とする人をこう呼ぶ」と肩を並べる実力となったというのは有名な話だが、魔法的特性は一種類ではない。

イギリスは驚異的な上達速度だったが、日本は二つ以上の流派を並立してその身に備えること、である。

魔法に多くの流派があることは常識以前だが、一個人はそのうちのひとつの流派しか習得できない。一般魔法と二字魔法を使用する人が増え、名の知られていない流派を使う人が少ないのはそれが理由である。

OSはひとつのパソコンにひとつしか搭載できない。

しかし、天皇家に限っては違う。一般魔法、二字魔法、その他を合わせて十、使用するのは最高ライン、少なくとも三つは備えている。具体的なイメージとすれば、ウィンドウズとマックを兼ね備えたパソコン、とも言おうか。喩^{たと}えなので、不遜、という意見は控えていただきたい。

他国にも王朝のある国はあるが、数で言えばすべての国の二割にも達しない。貴重という言い方もできてしまう。

その魔法的特性の強い王室を持つ国の三大国は、日本、イギリス、ノルウェーである。（単に魔法的特性のみによって、の三大国である）

また、別に健在である必要はないのか、ある日本人マジックオリンピック選手が家系図や蔵の中などを調べてみたら、実は戦国武将の子孫だった、などという話もある。

この選手は特に特性を持つてはいなかったものの、優秀な選手として注目されていた。そして、日本のマスコミを働かせたのは言うまでもない。

この例と同じように、イギリス貴族に優秀な『魔法使い』が多いことも注目された。しかし、王室にある人しか魔法的特性は持たないのだった。

イギリスと日本は、王室間交流でとても仲のいい国同士だ。

ああ、あ。

日曜の早朝に外にいるというのはなかなか気持ちいいものがある。それを体感しつつ、空哉は伸びをした。

服装は動きやすいジャージ。

TPOにもっとも則しているだろう服装。

今、町を軽く一周してきて、体も温まり、良いコンディション。今いるのは、（レオンとも会った）あの川原である。

あの時の目的は炎爆の練習だったが、今日は違う。

この川原の橋の下に、

「やあ空哉。おはよう」

「おはようございます、先生」

空哉の魔法の先生がいるのだった。

空哉は一応敬語を使いながらも、雰囲気的には仲のいい旧知だ。それもそのはず、空哉と彼は八年の付き合いなのだ。彼の外見年齢は、三十弱くらい。

「ちなみに、先生、掘った芋いじるな」

「ん、五時半ぐらい？」

空哉が腕時計を確かめる。

「すごい、ぴつたりですよ。体内時計は今日も順調ですね」

「いや、太陽の傾きから割り出したんだけどね」

そう言いつつ、川原の広いほうへ歩く。

「橋の下で寝て、何が面白いんですか。ちゃんと家があるのに」

「いや、放浪時代の名残かな。このほうが楽、っていうか」

「家の布団よりも？」

「家のベッドよりも」

歩みを止める。

足を止めたところは、大きな石（岩）の少ない、動きやすいともいえるところ。

「準備は？」

何の準備を、とは聞かない。

「万端」

それまでのように丁寧ではなく、です、と言わない。

それを言う前に、駆け出したからだ。

空哉もその先生も、互いに向け走る。

空哉がまず右腕でストレート。

その拳は『先生』が受け止め、またすぐ空哉が左でストレート。その間に右を引つ込める。その左ストレートも防がれる。

「まずは体術」

「忘れてませんよ」

そう、これは『先生』から空哉が教えられている図なのだ。

魔法技術者にしろその他の魔法を使う職業に就いている人にしろ、魔法さえ使えばいいというものではない。

ただ魔法を使うのでは、怪我の対応の仕方を知らずにサッカーの試合をするようなもの、緊急対応の仕方也不知道な車掌が列車を運転をするようなものだ。

それを全て含めて魔法を使える、ということもある、それほど当たり前のこと。

異常事態への対応。

または、その礎となる基本技術。

予想外の事態が起こったときに正しい判断ができる力。

基本的な体の動かし方。

それを空哉に、体で直に教えている図だ。

空哉が打ち込み、また防がれるということが短い間に何十回と繰り返される。

『先生』は、それまでの空哉の攻撃は全て手や腕で防いでいたが、今度は一步退いて避けた。そのせいで、大きく踏み込んで繰り出された右ストレートが空振る。

「そろそろ」

「魔法いきますか!」

その声で、二人とも一步飛び退く。

「座標確定」

『先生』がつぶやくように、しかし空哉に聞こえる程度の大きさの声で個法名を口にする。

そして、何もない空中を、そこに階段があるかのように駆け上がる。
「操重」

最後一段を踏み切り、『先生』が、通常の重力で落ちるよりも早く着地する。空を裂くように、その手刀が空哉を襲う。

空哉は、また一步飛び退く。

空哉は後ろに下がったせいで石が多く、足場の悪いところにいる。

『先生』は大きく手を引き、殴る寸前のようなポーリング。

「さあ、……操重!」

空哉がその声とともに足元にあった、岩ともいえるような石を蹴る。本当ならばありえない、その石が実は発泡スチロールできていたとしか説明がつかないような、サッカーボールのような動きを、空哉の蹴った石は見せた。

『先生』が引いた腕がそのリーチの射程の半ばに達し、蹴った石はそのまま行けば『先生』に激突する軌道に乗った刹那。

「^{かい}解、炎爆!!」

空哉が個法名を叫ぶ。

それに呼応し、爆発する。

……蹴った石が。

発動座標をその内部に指定された石は、発動された魔法の、放射状

の指向性を持つ爆発の働きで砕ける。

さながら、巨大な手榴弾のように。爆発によって破片を拡散させる点で、それは手榴弾と全く同じ発想である。

手榴弾は当たれば殺傷もあり得る爆弾だが、同じようにこの石片も殺傷があり得る。近くに人がいたり、警官などに見られていたら、ちよつと咎められるでは済まされないものだった。

速さを第一に考え、無系統魔法で座標確定を使う。範囲は、目の前、壁のように一面。

固められた空気は石片から空哉を守った。

だが、空哉と同じように石片をその身に受けず、また空哉と違って突撃、攻撃に移るのは空哉の師匠。

師匠の名にふさわしい、素早さの中に力強さを擁する動きで、空哉の真正面から腹に拳を叩き込んだ。

「ぐっは」

「まだまだだよ、空哉。といつても、なかなかいい線いつてたよ」

「……そりやどうも」

答えるのが遅れたのは、声を発するため。

空哉は、受けた拳のダメージで、川原に仰向けに横になっているのだった。

「しかし、炎爆が出てくるとはねえ……どこで『視』たんだい？」

この師範に、五色家の友達がいるとは言っていない。言っても何も起こらないだろうが、この『先生』の使う魔法からして、用心に越したことはなく、波風もないほうがいいのだった。

「……、黙秘権を使用します、」

「……………。まあいいさ。気にしない気にしない気にしないよ。千円札が日本銀行から出てようが、貳千円札が大蔵省から出てようが、価値が二倍だというのは絶対だ。僕は気にしないよ」

「え？」

「もしかして空哉、貳千円札は大蔵省って知らなかった？」

「全く」

そう言つて空哉は起き上がる。もしかして息の整うのを待つためにこんな話をしたのだろうか。ありがたいような気もするが、叩き込んだのは当人だ。ありたがることでもないのかもしれないが、でないとは話できない。融巡^{いたち}りはやめておこう。

石の上に寝ていたので足や背が痛い。三年もいられるのは相当な精神力の持ち主か、または魔法で感覚神経を麻痺してもらった人か（それにしても三年効果を持続させ続けるのは不可能だろうか）、またはマゾヒストか。

三つのどれにも空哉はあてはまらない。

「さて、手っ取り早く今日の勤めを果たすとするよ。まずは、何からかかるうか………そう、まず空哉のソレ（・・）が上達したことを褒めようか。操重は、今日はじめて見せたよね？」

「はい。先生にしては簡単な魔法でしたね。おかげで俺もすぐ複写^{コピー}できたんです」

「ご謙遜。まあ、式が簡単だったのは認めるさ。でも、あの早さは今までで一番だったね。そこは認めようよ。事故認識は成長の要だつて教えたよね」

「はい。では、こつちからも質問が……あの瞬間、手を引きましたよね。そのとき、全く違う魔法流派の色が見えました。あれは、何ですか？」

空哉のいう、『色』とは、人間が光の波長によって異なつて見る、その色ではない。

魔法を使う者が見るとはなしに見る、目には映らない、感覚で感じ取る魔力の奔流。それはそれぞれ違う流派によって違うものとして認識される。ウィンドウズしか見たことがないものがマックを見れば、それは違うものだとは判断できる。

その色を、先ほどのことを、空哉は違つた『色（OS）』として認

識した。その説明を求めているのだ。

それに対し、魔法の世の中にしてもあるまじき回答を返す。

「さっきのは、僕の親戚の子が考えた魔法だよ。名前は付けていなかったから、勝手に一字魔法って名前をつけた。さっきのは『縮』。説明は？」

「いえ、後で」

いくら魔法が世に溢れているといっても、それを開発することまでが簡単にできるわけではない。

本が溢れていても、本を書くことは難しいのと同様。

それを平然と言うのは、異端を通り越して、超越。

それをなんとも思わずに口にするのも、異端なのだが。

この二人には、異端たりえる理由がある。が、聞いていた人がいたとして、まず驚くのはさっきの台詞。

『全く違う魔法流派の色が見えました。』

つまり、一人で二つ以上の流派の魔法を使えるということ。

もしここに過度な愛国者がいたなら、平身低頭して謙^{へりくだ}るだろう。

複数の流派にまたがった魔法の使用は、天皇家のみがもつ魔法特性。それは即ち、天皇家であることの証明。事実、それにも使われている。

だが、彼は魔法的特性こそそれだが、皇室の人間ではない。

特性を持つ人間は、（その特性の強さはほぼ必ず薄いものだが）数は少ないが、確実にいる。そして、その中に王室・皇室の特性と被る特性は無いとされている。

少なくとも、確認されてはおらず、魔法学者全員が一致して、あり得ないとされている。

しかし、事実。

ここに、『二人』、天皇家と同じ特性を持つ『魔法使い』がいる。二人。説明を受けられるのなら説明を受けたいと思う。空哉は、思う。

いつもいつも、この特性のせいで苦勞をしている。実質的な苦勞は無いにせよ、それがばれるような振る舞いはできないし、その『気苦勞』も含めて。

皇室の特性だけあって、確かに、使える魔法の幅の広さで、実戦では強力な戦力になりえるだろう。（使える魔法と実力を持つて実戦力を考えるのは、魔法が戦争に使われることも考えられるからで、よくこの考え方はされる）天皇家の人間を戦場に出すことはあり得ないが。

そして、そんな『実戦』が来ることは無い。周りがすべて敵で、全員を殺す許可があるような事態にでもならないと、特性の真骨頂は片鱗も見せないだろう。

「じゃあ、さらなる上達のための講義に入るよ」

「……はい」

物思いをしていた空哉は、言葉を返すのに少し空白を要した。

「今日は少し長いからね。少し覚悟してよ？」

「はい。問題は一切、無いですよ」

少し首を振り、今は必要のない雑念を振り落とした。

休日の朝に、河原には他に誰もいなかった。

国の力、魔法の力（後書き）

長くなりました二つの意味で。いろいろと詰め込みすぎたりした感が大量にorz

まあ、次話に詰め込みます。いけるかなあ……
そういえば『先生』のなまえ、出してない。

あ、魔法三大国は完璧に俺選です。好きな国三つ。

魔法の名は（前書き）

フィクションですので実際のいろいろとは何の関係もないです、ハイ。

魔法の名は

空哉に教える彼の名前は、透^{とお}という。名字は知らされていない。自分の名前が好きでないらしく、その名前で呼ばれることはやめるように言われたことがある。

出会いは、小学五年生。その素質を見初めた、と彼は言う。

だが、空哉は本当はそうではないのではないかという気がしてならない。

証拠のない当てずっぽうだが。

彼はいくつもの流派の魔法を使える。それを、空哉は今まで幾度となく見てきた。

二字魔法、一般魔法は言うに及ばず、自衛隊と警察魔法特殊部隊の危険級魔法、一ガーデン（garden）、マイナーなどころでは火山、少林寺魔法。

彼の口から、放浪（といっても生温い程）を続けた時期があり、海外へも行き、その時にこれらを覚えたという。

空哉と彼の間にはいくつかの共通点があり、それを利点に教える受けている。

だが、と空哉は思う。

これは、皇室の魔法特性と確かに似ている。だからといって同じではないのではないか。

皇室の門をくぐるそれぞれの魔法の流派の師範は年間十人を超える。皇室にある人が直々に教える受けるために呼び、その場には監視役で数人の監察官に囲まれる。

それは、OSとアプリケーションを同時に学んでいるようなことだが、彼から受ける印象は、それとは違う。（天皇家どこか空哉は東京の土すら踏んだことはないが）

彼はアプリケーションのみを見て、取り入れている^{ダウンロード}様に感じる。もっとも、空哉の場合はダウンロードではなく複写^{コピー}なのだ。

そこに違いは無いのか、有るのか、自分でもはつきりとは分からないけれど、それは一種の区別だった。高校一年の精神では、こういうことも必要だ。

カラー
複写。

相手の使った魔法を見て、それを即座に自分の中に取り入れる。

高度な魔法であれば、複写はできてもすぐに使えるようにはならない。炎爆などはその類であり、許容力^{スベック}が追いつかないこともあれば、馴染むまでに多少の練習を要することもある。

しかし、簡単な魔法はすぐ使えるようになる。『先生』が操重と読んでいたあの魔法は『重力を操ること』としか定義付けされていなかった。だから、『先生』が重力を及ぼす力を強化する、として使っていたのに、物質そのものが持つ重力を減少させる、と、その働きかける方向を変えても、定義付けが柔軟^{なめわりともいう}だったおかげで即、使用できた。

魔法とは、この世ならざる力によってもたらされた現象のことだとよく思い違いをする者がいるが、そうではない。現象にたどり着くプロセスそのものが魔法なのだ。突っ込み禁止。

その証左にもなることに、無数の個法名があり、ほぼ同じような現象をもたらすものが多重存在していたとしても、それぞれの個法名でたどり着く現象が混ざったり互いに変化することは無い。

それは、個法名自体が鍵となり、その持つ意味、定義に間違いなく辿り着くからだ。

定義は、現象を引き起こす魔法を決定する役割がある。

個法名が数多くあり、もし重なることがあっても、それぞれ魔法を使用する人間が思い浮かべる一魔法（定義）は違うために、予想と違う魔法が喚起されることは無い。

海外の魔法が和訳されて日本で普及されることがあろうと、その定義をより確実に理解するためにその原文は必ず付いて回る。

一般魔法は世界中での普及を目指しているため、日本で一つの一般魔法を考え、作ることがあっても、必ず日本文と英文の両方で定

義が考えられる。

そして、名前も重要だ。個法名はそれぞれ、基本的にはよく考えてつけられる。二字魔法のように規則性があるのもあれば、似たような魔法と名前がかぶらないように考えた結果、思わしくない個法名がついた悪い例もある。

だがどちらにしろ、その名前が定義と無関係ということはまあ、ありえない。

名は体を表すという。実際は『名が体より少し大きくなって』見たいなのも多い。

故に、個法名を聞けばどんな魔法か、大体の予想はつくというものだ。

炎爆。

ハット
HOT。

三獄干涉。

スレイヴズ・グレイヴス。

少林寺魔法……は個法名ではないが、補助としての魔法をそれに組み合わせた武術であることは想像に難くない。

個法名は魔法を表し。

定義は、魔法の実体。

定義、イコール、魔法。

そして、定義を擦り抜けて応用する魔法使いは、法律の穴を擦り抜ける犯罪者に似ている。

「座標確定の定義は『基準としたものからの座標を定めること』だったけど、ここに二つ、抜け道がある。それは？」

「何を基準とするか、何を対象とするか」

「そう。まだどれだけの負担がかけられたら無効化されるか、とか、いろいろ細かいつつこみどころはあるけど、それはほとんどの魔法

に言えることだから省略。で、よく使うのは地球を基準にして空気を対象とすることだけど、それ以外にも応用は利く。もつとも、^{スタン}基本がない以上、応用なんて言葉は使すべきじゃないけどね。そしてさつきは対象こそ空気のままだったけど、基準は違ったよね。それは？」

空哉は、石片をものともせず突っ込んできたさつきのことを思い浮かべる。

あれは……………

「自分？」

自身はあるとは言えないが、しかしそれ以外に考えられない。

「正解。拍手」

と言いつつ、手など叩かない。

自身のない回答は、正答だった。

「自分を基準に確定して、そのまま歩いたりして移動すれば、対象物もそれに応じて移動する。いや、基準とされたものからの座標は変わらないのだから、移動するという言葉は不適当だね。まあ、そんなことはどうでもいい。」

空哉が自分を基準とすることに多少の疑問が残っているのは、鑑みることができるよ。多分、手を動かしたり、歩いたり、不安定というより不確定なものを基準としていることがすっきりしないんだろっ？」

片眉を上げる。

全然似合ってない。

「まあ、分かるさ分かるさ。地球という大きくて壮大なものを基準にするのとはわけが違う。確かにそうだ。」

でも、それだってプレートテク……テク……なんだっけ？」

「プレートテクニクス」

「そう、それ。プレートがあつて、それが動いて海や陸やができるってやつ。つまり、地球だって動いてるわけ。」

まあ、実際は僕らだって地球全てを基準にできるわけじゃない。

そんな力量を持った奴がいたら世界中が仰天だ。実際僕らは地球と言いながら、地面を基準としている」

似たようなもんだけどね、と面倒くさそうに視線をそらす。

自分でもこんな説明が面倒だと思ったのだろう。

俺も面倒くさい。

「まあ、その地面は必ずしも不動とは言い切れない。が、確かに大きな変化はないな。

だから使用者にも負担が少ないんだけど、その負担を少しばかり大きくしても大丈夫なら、自分でもなんでも、不確定なものを基準としても大丈夫、ということ。

許容力の話はしたっけ？」

いきなりの話題転換にとまどうが、ついていくことができた。

技術力のことだろう。俺としては自分の特性の方の、許容力スベックの方が馴染みはあるが、それは俺個人に限った話で、そんな話はしていない。今の許容力というのは、どの魔法の流派などに関係なく使われる、高い技術によって生じる余裕のことだ。

個人の力量によって違いは大きいが、（つまり技術が低くても少しの余裕はあるという逆接）ある程度力量があれば多少無理をしても問題なくなる。口に出さずに無系統で魔法が使えるのがいい例だ。口にしながら魔法を行使すればその手の負担はなくなるし、口にしなければ、ジリ貧でしか行使できない魔法だったならば、使えない。要はそういうことだ。

「許容力が大きければ、基準とするものだけじゃなく、不安定な物でも対象物にできるし、強度もまた然り。対象物、まあ大抵は空気なんだけど、作用する範囲を大きくとれる」

限度はあるけどね、と付け足す。が、それは個人の力量に限界があるものであって、魔法そのものに限界があるということではない。

「で、使い方の方の話になるけど、自分を基準にして、前方のいくらかの空気を対象にする。そうすれば、防御膜の出来上がり」

「膜というには誤認識だろうけど」

「うん、確かにどつちかっていうと盾だしね。それで、攻撃を防げるし、突っ走れば跳ね飛ばせるし」

「交通法に引っかけりそうな話だ」

そんなことをすれば、自動車事故並みの怪我になるだろう。

「他にもいろいろ、考え付くだけのバラエティーがあるから、寝る前とか、暇な時にでも考えてみれば？」

「俺は中二病か」

魔法がこの世界にある時点で中二病だが。

しかしいってもそれは詮無いことだ。

「……ああ、そういえば大事な話、というか、相談が」

「？ 何か困ったこととか？」

「いや、そういうんじゃない……」

話じづらいということはないが、何と言葉にすればいいのか、迷う。少し考えてから、言う。

「高校になって、これから魔法を使う機会も必然的に増えて」

「まあ、高校から本格的に習うしね」

「それで、今まで本当に多くの魔法を学んできたけど、それは横から見ればすぐに、その、おかしいってばれる。だから、それを隠せるような、誤魔化せるような魔法とか、誤魔化す方法とか、そういう、カモフラージュ？ みたいな……」

「つまり、おおっぴらに魔法を使えるようになりたいってこと？」

今の言葉で的確に伝わったとは考えていないが、それでも言いいたいことをつかんできた。伊達に何年の付き合いではない、ということか。

伝わったらしいので、一つうなずいておく。

「うーん……それはつまり、魔法の流派の色を隠す、ってことになるよね……難しいなあ……」

やはり、無理な頼みだったのだろうか。

「一つ、心当たりがないでもないんだよね……」。

僕が一度戦ったことのある相手なんだけど……ああ、手を合わせた

って意味ね、殺しあつたってことじゃないよ」

そう言つて、視線が合う。

それは、幼稚園児に微分積分を聞かせるような、言つても仕方ないけど一応言つておく、というような表情だった。

「そいつは、見た目、一般魔法を使う『色』をしていたんだ。もしたら、使つた魔法が一般魔法じゃなかったんだよ。少林寺魔法が出てきたんだ。

そういえば中国だったっけ。

それで意表を突かれて、最初は本当にそいつのペースで闘わされたよ。

で、闘つた後に聞いたら、『色』を意識して変えることができるらしいんだ。

それがそいつの特性だったのか、それとも訓練次第で身につけられることなのか、分からないけど、とりあえず言つとく」

ふう、と一息。

「まあ、それはこの場合関係無いとしてしまつて。

目には目を、歯には歯を、軍には軍を、魔法使いには魔法使いには魔法使いを……

つてなわけじゃないけど、魔法には魔法で。偽装できるような魔法でもあれば、いいんじゃないかな？

何とか、考えとくよ」

「……はい。しえいしえい」

「使えない言葉を使わない事」

中国語には程遠かつたのか、顔を顰められた。

魔法の名は（後書き）

いつにも増して拙文な気が……orz
遅くなったことを……詫びてもしょうがないよなあ……
あ、遅くなります、次から。

倒錯の上に立ち（前書き）

もはや三田坊主では済まされない程、間が空いてしまいましたw

倒錯の上に立ち

二十一世紀にはとんでもない数の会社が乱立していたらしい。いや、今も、当時と同じぐらいの会社はあると思う。

だが、この時代は、数々の災難を乗り越えた上に立っている。その災難の一つに、『企業一体化思想』という一つのムーブメントがあった。

例えば、一つの製品を作るにも多くの人の手、企業の手が必要だ。ならば、それを最終的に扱う企業が、その下につく企業をまとめて傘下に入れるのが理想、とするのが『企業一体化思想』だ。まとめて傘下に入れるといっても、全員を会社員にするというわけではなく、あくまで『すべて把握する』だけというのが平均的なところ。

だが、この思想にはいくつかの弱点がある。そののひとつとして、頂点の頂点、つまり社長とか、最高経営責任者の才能が足りないと、悲惨なことになる。

またひとつとして、情報の疎通・把握が足りないとその意味を成さない。

よって、企業一体化思想は一時の流行で終わり、初めに手を出した会社のいくつかがつぶれた。

このように、マイナス面が大きかった企業一体化思想だったが、細部に目を向ければ、少しのプラスもあった。

いくつかの会社の飛躍的な成長。

経営責任者、とは言うが、その名の通り、実態は主に経営の責任を負っただけである。（無論、他にもあるといえばあるがその程度だ）だが、その枠に必ずしも当てはまるとは限るまい。

頂点が違う会社は全てが違う。

とてつもないカリスマ性をもってその会社を企業一体化思想をもって作り変えた社長もいる。所謂『天才』だ。

そして、そのうちの社は、歴史によって掘られた堀に守られ、信頼によって築かれた城壁に守られてのうのうとしている数々の会社を、堀は軽々とわたり、城壁は楽々とのぼり、その寝首を掻かんとしている。

社名は、『ノータイスNOTICE』。

昼から、J S Kに乗って適当にそこら辺を動き回っている。

J S Kとは、ジェット・スケート・ボードの略。

製造・NOTICE。

それほど一般的でもないが、珍しくもないこの乗り物、少し操縦が難しい。

左を向いて乗るとして、右足を置くところに少し大きな凹凸がある。右足を置けばすっぽりと嵌る。

そこは回転して、回すことでアクセル、左足にもあってそっちはブレーキ。

シートベルトなどあるわけない乗り物なので安全性は低いが、しかし今の時代にしてもいつの時代にしても、乗り物なんて全て危険なのではないか、と思う。

ただの言い訳だ。

魔法があるので昔よりはまだ安全だろう。

で、J S Kは昨日上限まで充電しておいたのでパワフルに動いてくれる。

乗れば両手が空く乗り物だといってもそこには慣性というものがあるので、飲み物はまずい。（それでもストローで飲むタイプのものを買えばいいのだが）というわけでコンビニで飴を買った。棒付きはもしもコケたときのダメージが大きすぎるのでやめて、個包装の。

キャラメルバナナ味シチリアーノテイスト、らしい。

しばらく動き回っているが、特に目的もなく動き回っているの
いろいろ見ることができた。

例えば、ある室内運動場で空手の大会が開かれていた。勿論見て
いない。

例えば、公園で野外ライブが開かれていた。勿論聞いていない。

例えば、………何があったわけ？

動き回っているだけで、実際に目にしているものはかなり少ない
らしい。

ああ、そういえば、前から行こうと決めていた場所があったんだ
った。

私立榆宮第二高校。

俺の入学したのは私立榆宮高校。第一、などと付いていない。

大抵は榆宮高校、もしくは正しくないが第一高校といえばこっち、
第二高校、といえばあっちで伝わる。

というわけで不便はない。

俺はそこに向かうことを決め、ポケットにたまった飴の包装紙を
可燃ごみと書いてあったごみ箱に入れた。

高校が近くにあっても別に良いことは無い。

なら遠くしようとしても考えたのだろうか、第二高校は結構遠い。

またポケットの中に飴の包装紙がたまってしまった。

それに、同じ飴をずっと舐めていたら飽きる。

その味が嫌いになりそうな直前に、第二高校の敷地に着いた。

榆宮高校より、少し大きい、校舎。いや、大きく見せているだけ
かもしれない。なぜなら、校舎の周りに体育館のような建物がある
のだから。

二つ、三つ……いや、影になっているのもあるかもしれない。

見えている一つ一つの建物が校舎と同じだけの高さを持っている

のは、敷地を有効に使ったためだろうか。

楡宮第二高校。

この高校は、部活の数とその成績で有名だ。

希望者がある程度いれば新しい部活を立ち上げることができる。

（一人でやる部活はどうなのだろう）

部費の割り当てが少ない新しい部活でも、成績を残せば割り当ては増え、有名になる。そして、部員が入って盛んになる、というわけだ。

そうやって自主性を育て、社会で通用する人材の育成を、とか何とか、入学案内の紙に書いてあったのを覚えている。数ヶ月前のことだし。

ただ部活の全体数はあまり変わっていないらしい。

新しい部活ができて、それと同じだけの部活が減っていくわけだから、道理だ。

作られた部活は、ほとんどが同学年の仲間で、なのだろうし、その部員たちが卒業してもその部活に入る新入生はいない、ということらしい。

まあそういう事情があるにしろ、並み以上の部室が必要で、こんなに建ち並ぶと。

自分の部活を作るのは一見楽しそうだが、そんな一時の勢いに任せれば、後々みじめになってくるのは目に見えているので、俺は第一の方を選んだ。（理由はそれだけでもないが）

で、新部活は必ずしも淘汰されるわけでないらしい。

今年、ナイフ格闘部と魔法格闘部が生き残ったらしいと聞いた。

ナイフ格闘は結構一般的な（なじみのある、という意味で）競技だ。

歴史は浅いが、スマートでかつこいい、という理由で爆発的に知名度を上げていった。

今はナイフ格闘をショーとして見せる商売を仕事としている人もいるが、そちらは見世物、派生で、本当の本物はこっちである。

マジで刃物を使ったら危ないので、形はナイフだが切れないものが使われている。それでも危ないといえは危ないが。

俺はルールは詳しく知らないが、投擲を許可するのと、切ることだけが許可されるのと、あと切るのも投げるのも許可されるのとで三つあったと思う。

フェンシングみたいなものか。

魔法格闘は魔法を併用した格闘で、蹴ったり殴ったり、こちらは普通に格闘だ。

魔法といってもいろいろあって、魔法格闘部で使われるのは主に攻撃魔法と攻撃補助魔法だ。

あまりこの試合を見たことがないので分からないが、こつちも攻撃補助魔法オンリーと両方オツケーなとで二つ、だったと思う。どちらの部活も、試合や練習ではプロテクターを着けてする。はず。

あまり強くない日差しの中で練習している野球部を右に見ながら建物の一つに近付くと、気合の入った声が聞こえてきた。

これは……剣道部か。方向からしたら向こうの建物からだと思うが、よく聞こえてくる。流石、剣道、他の部活とは一線を画する競技だ。

と、前を見ると、建物の端、直角のところにドリンクの自販機があった。（食品の自販機もあるので区別される）

ちゃんと横に分別できるようにごみ箱があるのは、やはり公立高校なのかもしれないが、個人的に学びの場に自販機があつていいのかとも思う。

思うだけであつて、自販機があることには賛成だけれど。

J S Kを降りて、何か買うことにした。

ブレーキをかけ、自販機の前に行く。乗ったままだと身長が幾分か高くなるので、いつもより低い位置にコイン投入口がある。せつかくなので一番高い位置のを選んだ。

自販機のデザインは昔から変わっていないらしい。お金を入れて、

ボタンを押して、ガコンと落ちてくる。

何やら奇抜なデザインの自販機もあるようだが、この人口のさほど多くない都市でそんなものは見たことがない。

高い身長は下にあるものを取るには不便なので、降りてから取り出す。スポドリ。

取ってから缶を開けると、左から、つまり建物のかげから人が出てきた。

「あ、すみません」

まず目に入ってきた身長で、おそらく先輩なのだろうと思い、そう言って身をどける。

どけただけ。

ペットボトルを捨てたいのでどっか行く気は無い。とりあえず飲みつつ、壁にもたれる。

横目で自販機の方を見ると、その先輩が落ちてきた飲み物を拾ってから、（そして開けてから）こっちに向き直った。

うわ……

居心地悪い……！

「何だ、お前は」

「……………は？」

いや、何だはこっちの方だと思うのだが。

何なのだろう。

「いや、いきなりは悪かったな。だが、私服で学校へ来るのは許可されていない。用があるなら制服、もしくは指定のジャージで来い。一年生だと思うが、知らなかったのなら今教えてやった。注意しろ」話の内容は理解できた。要するに、この人は俺を第二高校の一年生だと思って、俺に注意をしたと、そうなのだろう。

的外れだが。

理解できたことで、余裕ができ、その先輩を観察できた。

身長が高いから男だと思っていた。だが、声からもわかったが女子だ。

服装はジャージ、そうか、指定のジャージとはこれのことか。だが、第二高校のジャージのデザインは今年度から変わったらしいので、一年生の着るのはこれではないのだろう。

髪は後ろで一つに縛ってある。少し、短め。

左手には長い袋をもっているが、袋の形からして、その中には竹刀が入っているみたいだ。

視線を合わせないことは危険を逃れる一つの方法だが、それをつい破ってしまうような、目を引く美貌。第一印象、強烈なこと甚だしい。

「……………」

「どうした、返事はないのか。お前の人格が知れるぞ。返事は間髪いれず、するものだ」

さらに、第一印象、強烈なこと甚だしい。

いろいろ考えていた俺を、礼儀に反することとして捉えたようだ。実際、その通りだが。

「いえ、あの……………俺、第二高校高校の生徒じゃないんで」

一応、弁解してみる。

「？ ならば服装のことは良いとして、何故ここにいる。一年生とすることは否定しなかったが、それなら学校見学に来たわけでもあるまい」

……………喋り方古風な人だなあ。

「えっと、特に用は無いんで…………飲み物を、お世話になり…………」

萎縮しているわけではないが、決まりが悪い。別に悪いことをしたわけでもなく、ただここにいる理由を聞かれたいるだけなのに、先生か、あんたはっ！ って思われる。何の罰ゲームだ、これは。「そうか。悪かった。だが、学校に来る時の服装は気をつける。私みたいなのに捕まるのも嫌だろう」

ならするなよ！ ってか、自覚あるのかよ！

とか何とか、突っ込みそうになったのを、危ういところでこらえる。

いつもなるの突っ込みをしているので、こういう状況は危ないのかもしれない。

「言いたいことがあるのなら言え。氣遣いはいらん」

さっきの俺を見て、不快げな顔になった。

この人は、……いや、人を第一印象だけで判断しては駄目だ。それがたとえどんな第一印象の強い人でも。

「あ、いえ、よく考えると大したことでもなかったんで……」

言いつつ、半歩、下がる。既にスポドリは残り少ない。さっさと飲んで、去ってしまおう。

と、思ったのだが、なぜかこの人は俺の歩く動作を見て興味深げに俺の方を見た。

「あの、なんですか？」

「お前は、魔法格闘部所属か？ ……ああ、いや、こんな早い時期に入部届けは出されないか……」

魔法格闘を、やっているか？」

全く予想外、全く方向違い。

わけがわからない。

「いえ、全く」

「全くか」

「全くです」

「ふむ……嘘はつけんぞ？」

執拗に聞いてくる。何なのだろうか。

「口で説明しても、立ち居振る舞いからあらわれてくるものだ。目は口ほどに、というが、振る舞いは口よりも、とも言える」

「はあ……」

「まあ、話していても進展はなかるう」

おっと。話を切り上げてくれるのだろうか。

そんな、期待をした俺がバカだった。

この人は、いきなり竹刀を上へ放り投げ、俺に向かって竹刀を投げた方と逆の手を突き出した。

その手は魔力を纏っている。

魔法格闘。

魔法という名がついてはいても、自分の体を動かして闘う、格闘。闘う意思を、この人ははっきりと見せたのだった。

これはまずい……………（と考えているのはほんの刹那の出来事で、実際はこんなにはつきりと言葉にしているわけではなく、直感でこのようにことが頭に浮かぶ、というだけである）

これは話していた内容から考えても、魔法格闘をしようというのは、誤解の余地はない。

考えるうちにも手は迫る。

さつき立っていた間合いは大体2メートル強ぐらいだとおもって、剣道の足さばきなのか、いつの間にか間合いを詰められている。

纏う魔力が増す。

もうしょうがない。といっても魔法格闘自体を避けたいわけではないが。

結論、応戦。

掌底の形で近づく掌。^{てのひら}

もう、魔法を発動せんばかりの魔力を纏っている。

「掌底爆^{しょうていこはく}げ——」

「天地鳴動！」

物体は全て振動している。天地鳴動はそれを変換・拡大・調節して可聴域の音とする魔法だ。振動なんてその場で違うものだし、変換・拡大・調節も人間の技量では細かいコントロールはできない。故に、相手の妨害以外の用途が（今のところ）無い、使い道の限られた魔法である。

ちなみに、教えられたのはあの『先生』だ。

この先輩が、がくつ、と体を崩す。

それを見て、俺は後ろに跳ぶ。後ろに障害物がないことは分かっている。

「走駆」

崩した体をその言葉で疾走へ持ち込む。

立ち直りが早い。魔法格闘部の所属なのだろうか。

だが、悠長なことは考えていられない。

走りこむ姿を目に収めながら、次の魔法を考える。

もう、なんだかめんどくさくなってきたし。

「座標確定、撃」

腕を基準として空気を纏わす。これで打つつもりだった。

だが、計算外。

空を舞っていた竹刀をつかんで、振り下ろされる。

俺は腕を、竹刀を防ぐために構えることしかできなかった。

倒錯の上に立ち（後書き）

この話、ほんとはもっと長くて、書き切れないので切りました。
プロットの立て方を考えねば。

意味不明・不確定だらけのミライ（前書き）

誤字脱字、アドバイス・感想など下さると死ぬほど嬉しいです。

意味不明・不確定だらけのミライ

「えっと……」

硬直したまま、とりあえずの言葉を口にする。

振り下ろされた竹刀を受け止めている右腕（正確には受け止めているのは腕を基準として固定された空気だが）を戻したいが、真剣な目でにらみ合っているこの状態から、迂闊に動くわけにもいかない。

動いた瞬間に第二撃が来るかもしれないし、俺はもう戦闘（？）

継続の意味はないが、向こうはあるかもしれない。

その中で口にできたのは、意味の希薄な言葉だった。

「……………」

俺のこの言葉を印としてか、構えを解く。

嬉しいことに、もう戦意はないようだった。

だって、俺、そんなに戦いたがりでもないし。

「悪かったな。いきなり」

後ろの方に転がっている飲み物を歩いて拾いながら、そんなことを言う。

「はあ、まあ……………説明がほしいんですが」

謝罪とか、そういったことは望んでいない。買ったスポドリは向き直られたときにふたを閉めて、魔法格闘になった時に転がしてある。

俺も、歩いて転がしたスポドリのところまで行って拾う。

「説明か。あまり深く考えてはいなかったが」

「何の思慮も無しに、こんなことを？」

呆れ100パーセントだ。

「いや、思慮がなかったとしても、理由はちゃんとある。お前が…

……………そういえば、自己紹介もしていなかったな。私は高^{たかとうかすは}？ 数葉と
いう」

「あ、俺は白空哉です」

言外に自己紹介を要求され、一応名乗る。

白のところが九十九と変換されても別に構わないし、漢字のことは触れない。

「つくもくうや……では九十九^{つくも}」

あー、そっちで変換されたか。

まあ、どっちでも会話は成り立つし、物語進行上には何の問題もないんだけど。

メタ的発言だ。

「お前の振る舞いなどからして、魔法格闘をやっていると思ったのだが」

それでいきなり戦闘ですか。

RPGでマップを歩いてて敵と遭遇するくらい唐突だ。

「ていうか、そんなことで分か

「分かる」

台詞ぶった切られた。

逆の括弧も付いてねえ。

「素人や弱い奴なら分らない、ということもあり得る。だが、骨の髄まで戦いに染まった者は、しぐさに、言動に、雰囲気表れてくる。お前のように、な」

骨の髄まで？

俺が？

バトルジャンキーとでも言いたいのか？

少なくとも、自覚はない。

だが、他視点から見たところで、何が違うというのか。

自分のことは自分が一番分かっている。

例え自意識の中に他視点の情報がなかったところで、情報量としては自分の方が圧倒的に多い。

多い、はず。

「まあ、それだけだ。だが、一つ言っておこう。

お前は強い。

その強さを以って戦い続ける。

その強さが偽りであろうと、空洞であろうと。

とりあえずは魔法格闘部に入ってみる。勝ち上がれば私と戦えるぞ。打ち負かしてみせろ」

そう言って、去っていく。

とりあえずわかったのは、この人、もとい高？数葉という人は魔法格闘部に所属しているらしいということ、

疑問として残ったのは、それならなぜ竹刀を持っていたのかということだった。

スポドリが温ぬるくなっていた。

そんなこんなでいろいろあつて、現在市立図書館。

なんでかかっていうと、もとの理由の一つがここだからだ。

調べ物。

大した大きさの図書館じゃないが、魔法関係の文献……もといデータの割合は高めだ。

その分他の本の割合は低く、苦情が多いらしい。

だが、俺は魔法関係の方に用があるので問題はない。

目の前の棚の、目の前の本に手を伸ばす。

『魔法分類学入門』。

入門とか言いつつなかなか大きく、厚い。おそらく、大学生とかを対象に考えて書かれた本なのだろうと思う。

立ったまま、目次のページを開く。

探していたページはすぐ次だった。

魔法分類学・はじめに

今日、魔法という技術は私たちの生活において、なかなか大きな割合を占めています。

大雑把に歴史を紐解いてみると、こうなります。

2186年、正式に魔法が確認される

2187年、表意文字依存魔法協会（二字魔法協会）設立

2190年、一般魔法連盟設立

2190年、世界で魔法の使用を前提とした軍隊・組織の編成が着手され始める（日本では警察の魔法機動隊や国軍の魔法隊がこれにあたります）

2195年、魔法特性・希少魔法特性が確認される

2196年、マジックオリピックの設立が決定

今では当然のように使われる魔法も、四十年ほど昔では空想に過ぎなかった物だったわけです。

この四十年という時間によって、魔法が確認される前から生きる人が、されたあとから生きる人かに分けられます。

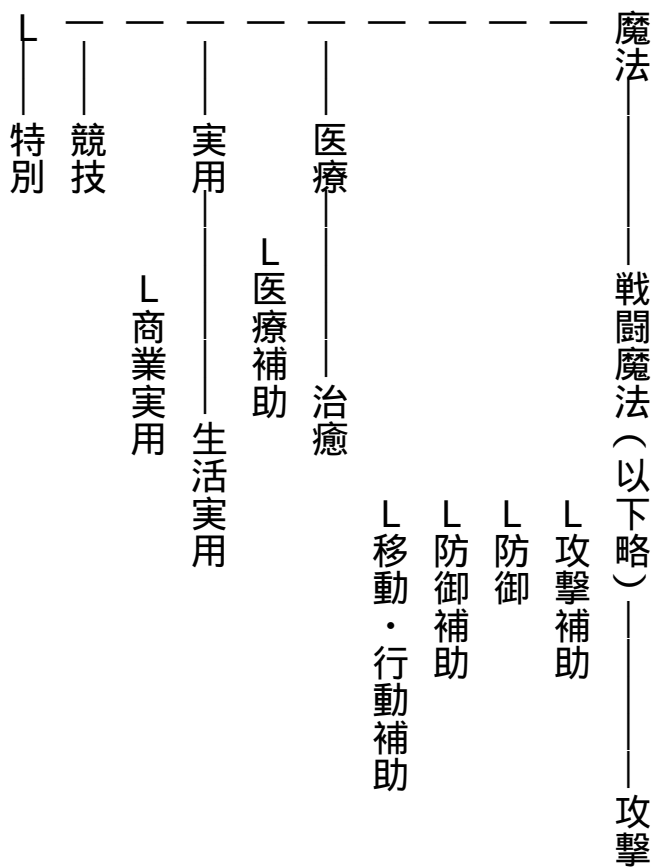
されたあとから生きる人の方が魔法に携わる仕事に就く割合も大きく、された前から生きる人で魔法を使える人は少ないです。

しかし、魔法に携わる仕事をするのと、魔法を使うこととはイコールではありません。

魔法分類学は、魔法を使わずに魔法に携わる方法の一つです。

面倒になってきたので、数ページ飛ばした。

——と、このようなルール、決まりによって世の中の魔法が分類されます。
簡単にまとめてみましょう。



働きが似ているものは、二つ、またはそれ以上の項に分類されるものもあります。
分類されるポイントとして、

戦闘魔法は文字通り、闘いの場面で用いられる魔法

攻撃魔法は直接相手に傷害を与える魔法

攻撃補助魔法は自分で殴ったり、切り付けたりすることができるようにするための魔法

防御魔法は相手の攻撃を弱めるなどして威力を減少させる魔法

防御補助魔法は相手の攻撃に対して、硬化などの方法で自分が防げるようにする魔法

行動補助魔法は自分の動作に影響を与える魔法、移動魔法は物を動かす・空に浮かばせるなどの動きに影響を与える魔法、または自分の動きに対して影響を与える魔法

医療魔法は医療および保健指導を助ける魔法、または医療および保健指導を行う魔法

治癒魔法は主に怪我を直接的に回復させる目的でつかわれる魔法
医療補助魔法は怪我の回復の目的で免疫や回復力などに影響を与える魔法、精神病に良い影響を与える目的でつかわれる魔法

生活実用・商業実用魔法はそれぞれ日常生活で役に立つ魔法、企業で事業のために使われる魔法

と、このような点で分けられるということを押さえておきましょう

本を閉じる。

もともと専門的なことが知りたくてここに来たわけじゃない。

この間の授業で聞き逃したところがあつたので、ついでに予習も兼ねられればと思い、調べに来たのだ。

まだまだ友達にも深い交友のある、授業のことを気軽に聞ける奴はいないし、同じクラスだがなるにはなんとなく、聞きたくない。

意地だろうか、自分では考えている。

それに、この本だけが目的じゃない。

進路のこととかも、高校に入ると聞かれていくらしいから、とりあえず視野に入れている軍の魔法科か警察の魔法機動隊（魔法を公おおやけに使えれば他でも可）のことを、軽く見ておこうと思って、ここにいる。

進路のことなんて、深く考えたことがないので、困惑している。もしくは、辟易している。

それでも、何も考えないよりはましじゃないか、と思っている。
そんなことを考えながら、軍が警察の情報を求めて他の棚へ、

フリーズ
凍結。

同じ名前の魔法をどっかで聞いたことがあるような気がするけど、その魔法を使われたから止まったわけではない。

歩けば自然に目がいく方向に、幼馴染の横顔があつたからだ。

棚の本を取って、立ったまま読んでいるようだ。

どの魔法を使えば問題を起こさずに驚かせられるか、と半ば条件反射で考えている頭を強制停止。

そもそも公共の場で魔法を使わないのはマナーだし、そんなことを条件反射で考えるようになってしまった自分の頭にため息をつく。
普通に声をかければいいだろうが。

「おーい、なる。調べ物か？」

「へ？……あ、空哉！」

歩きながら、俺は公共の場であることを考慮して、声の大きさを少し抑えて声をかけた。

が、なるは突然声をかけられればそんなことを意識する暇などなく、その張りのあるいい声が響く結果となった。

自分で引き起こした結果に肩をすくめながら、顔をこちらへ向ける。

その顔には、驚きと喜びが半々だった。

……まあ、思いもしないところで知り合いに会えば嬉しくもなるよな。

「なにしてんだ？」

「……ああ、軍のことを、ちょっと、な」

ああ、そういうことか、と即時理解する。

なるは緋夜家の長女である。

つまり、五色家の一つである朱浦家の分家としてのその緋夜家であり、朱浦を含めた五色家は常に実用に耐える実力者を保持していなければならない、というのが五色家の慣例である。

その『実力者』は五色家五つの家の人間に限らず、傍流であつてもその血族であれば良く、そして実力、つまり戦闘力があれば五色家の『実力者』、いざという時の実働部隊に組み込まれる。

つまり、なるは十分にそれ（・・・）の範疇。

しかも、今の時点でかなりの戦闘力（魔法力ともいう）があり、これから順調に成長すれば国内でもかなりの実力者になるのではないかと俺は思っている。

なるがいつだったか話した内容によると、有力候補として名が挙がっているらしい。

しかし、態度から見ても端々で見せる本人の思いも、そんな『実働部隊』に組み込まれたくないと思っている。

その具現が軍だ。

日本の軍隊が自衛隊でなくなったのは俺が生まれるはるか以前の話で、拡大するアジア近隣諸国の軍事力に自衛隊では有事に対処できないということで、活動の自由度を広げるために、普段の活動の内容は変更しないものの、名前だけ変えた、ということだ。

憲法も一緒に自衛隊に関する部分も一緒に改正された。当時はそれだけの国民の理解があつたのだらうと思うと、理想的なような、狂的なような。

……………おっと、逸れたか。

それで、軍にいても非常事態には収拾されるが、いないと支障をきたすほどの重役、あるいは重責があれば召集に応じなくてもいいことがある。

どちらにしても有事には戦わなければならないわけだが、いいなりにさえならなければ、それがなるにとって意味のあるものなのだろう。

「……まあ、俺のことはいいさ。それで、空哉は何をしに？」

「この前の授業で聞きそびれて」

「ばーか」

とかいいつつ、顔は笑っている。

「そこ、きりのいいとこだったら、コーヒーでも飲まないか？」

「ああ。ちょうどいいとこだ……というか、そこですぐにコーヒー
って出てくるのが、空哉というか」

くすくすと、また笑う。

その表情といつもものなるのイメージがあまりにもアンバランスで、
思わず視線を背けた。

「この本借りてくるから、自販機のとこで待っててくれ」

「ラウンジな」

「進路、か」

「めんどくさいことこの上ないよな」

「そのとーり」

そういつて、コーヒーの入った紙コップを逆さにする。
飲み干した。

ここにはステイタス・コーヒーがあるので少しばかり安心。（ス
テイタス・コーヒーはあるマイナーな飲料会社の製品の一つで、規
模が小さいのでこの辺りで地域販売されているだけの地元的なコー
ヒー。俺は好きだがなかなか同意してくれる奴がない）

「なるは軍を考えてんだよな？」

「いや、前はそうだったけどな。分家として何かの仕事をしていれ
ば、軍に行かなくても同じように抵抗できる、みたいだから」

抵抗、か。

「それはどういう理屈なんだ？」

「俺一人しかやってない仕事があれば、俺が抜ければそれは回らな

くなる。自営業なんかは駄目だけど、魔法関係なら、って感じ。…
…どっちにしる魔法は一生付きまとうんだよねー」

言い終わると紙コップを口につける。ちなみになるはリンゴジュース。

「なんつーか、こーゆーのって、大人の世界？ とか言っただろ。
面倒なことばっか、思うようにいかない、そんなの」

思いついたことをつらつらと口にする。

「面倒っていえば、必要なんだ、とか、何故、って聞いてもそういうもんだ、とか」

「……まあ、大人の全員がそうでもないんだけどな。家の父さんなんかそうでもないほうだぜ」

「続けて」

「俺が分家なのは、父さんが、薄いながらも朱浦の傍流だから。本家の人間だったらもつと家の仕事とかやらされてたんだろうけど、父さんは本家の人間じゃなかった。本家だったら五色家の一角を担うものとして、とか何とか俺に小さいころからそんな教育してたんじゃないかな。だから、俺に本家も分家も五色家も関係なく、普通に生きていけるように育ててきた。

父さんも若い頃は魔法の研鑽とかしてたらしいけど、才能はあっても、自己の研鑽は好きじゃなかったみたいで、強くはなれなかった。いや、違う。

ならなかったんだ。自分の意思で。

それで、ほかの、本家とか家のことに積極的に関わってる人とはまるっきり違う生き方になったわけ。

そういう点、俺は父さんに感謝してるし、それを感謝できるのも父さんのおかげだ。でも、」

「魔法の研鑽は、お前はすごく好きなんだろ」

「……………そう。父さんは魔法から離れることで、朱浦という鎖を逃れた。

でも、おれは、魔法を手放したくない。魔法が好きなのに、それ

を使う五色家の呪縛を逃れようとしてる。

自分の中で、すごい矛盾してんだよ……」

そう言い終わって、息を吐き出す。ため息にならなかった。

俺の同情を引くために話したわけでもなく、どうすればいいのか、悩みの解決策を求めるために話したわけでもない。

ただただ、自分の内面を言葉にしただけのようだ。

だが、聞いている人間がいれば反応するのが自明の理。

「……俺は頭良くないから、それをどうにかできるような方法を見つけれられるわけじゃない。でもさ、そういうの、実際に取れる行動なんて限られてるんじゃないか？」

「……空哉？」

「朱浦が嫌い、本家が嫌い、家業が嫌い。

魔法が好き、研鑽が好き、家族が好き。

戦いたい。

戦わせられたくない。

今ある条件なんて、こんなもんだろ。

そのうちに別の条件が出てくるかもしれないけど、出てきたときに考えればいい。

今、考えられるだけ考えておいて、できることをしておいて、それだけだろ」

自分から言っておいて馬鹿みたいな話だが、俺のこの話、何の参考にもならないよなあ……。

「言ってくれたところ悪いけど、大して解決になっただけでねえぞ、空哉……っ。」

「わかったよ力になれなくて悪かったなどうせ俺はこの程度だよ」

「無言の鉄拳」

「無言じゃねえ……ぐはっ」

リアクションはしたものの、あまり痛くなかった。
鉄拳じゃないじゃん。

「一息で言い切ってたんじゃないか」

「事実だ」……わかったから握り締めた拳を開け」

ふう。

はあ。

ダブルため息。

「そりゃな、解決にはなっていないかもしれないけど、そうやって一緒のことに頭を悩ませてくれることが嬉しいんだよ。そもそも、これは俺の問題だから、俺が考えるべき問題だ」

「それが俺に対する慰めなら、失敗してると言っておく」

「黙れからっぽ」

「うるさい炎」

このからっぽと炎は、それぞれ互いを示している。
軽い悪口的なニュアンスで。

「……………」

「……………」

「なら、二人で考えてみるか」

「三人寄れば……………」

「一人足りないな」

「そうだな」

「家が嫌いなら、家を離れればいい」

「いや、家族とは離れたくない」

「親戚には勘当したとか言っておいて、嘘をつく」

「母方の方はどうするんだ」

「親戚には大学出てから音信不通とか言っておいて」

「五色家の調査能力なめんな」

「まじでか」

恐るべし、準国家的権力。

「大体、勘当とか、理由がないとだめだろうが」

背もたれに体重の半分は預けているんじゃないかと思わせるぐら
いにもたれ、天を仰いでいる。いや、天井か。

実際俺そう言われたら信じられるよこれ。

「勘当……家……アイダ？」

「どういつ思考回路してんだよ……歌劇の？ あれは家じゃなくて身分の差……だったっけ？」

「ロミジュリ？」

「歌劇つながりか。二つの陰悪な家があつて、二家間の男女の中略、悲劇か」

「略してんじゃねえ！」

殴られた。さつきと違い、今度はかなり痛い。

しかも、迷惑にならない大声だったし。

どういつ構造してるんだ、こいつの喉は。

「略してもわかるからいいだろうが……あれ、結局どうなるんだっ
たっけ？」

「略すなよ、二家間の男女の許されざる恋とか、」

「故意とか？」

「親友を殺された復讐とか、」

「復習とか？」

「愛のない結婚から逃れてロミオと結ばれるために毒まで使つて足搔いたりとか、」

「藍のない血痕から……っか、よく知ってるよな、そんな細かく、」

「もっかい殴られる誤変換のパレード」

「分かった、分かったから殴るな」

確かに俺は悪かったが、（悪意の介入があるんだから殴られても文句を言うつもりはない。つくづく暴力や喧嘩もひとつのコミュニケーションだと思う）ここまでで一番起こっているように見えるのは何故だろうか。

半年位ぶりにこんなに怒つたなるを見た気もするし。

「……で、最後二人とも死ぬんだし」

「まじか」

「ジュリエットが後追い自殺」

「……死ぬのは、絶対に最後の手段な」

「……おう」

それで、何の話をしていたんだったか。

「勘当の理由」

「ああ」

めっちゃ逸れてるし。

「死ぬのは滅茶苦茶に最後の逃避だから……じゃなくて。

あの二人、結婚でもしようものなら、両家から勘当は確実だと思うんだけど」

「いや、二家の争いの終止符を打つきっかけになれば、とか期待されてたけど」

「へえ……望み薄だろうに」

「まあ、俺もそう思うけどさ」

「勘当……ロミオって一人息子だし、それはないだろうけど」

というか、後の方になってロミオ都市外追放だし、と付け加える。

駄目だ、俺全然分からん。

分からないなりに考えてみるけど。

「暴力で解決」

「無理だろ」

「……両家にかけてどうにかするとか」

「無理だろ」

「……じゃあ、駆け落ちとかすれば、家も何も、関係なくなるだろうに」

「駆け落ち!？」

ん。

ここまでで一番劇的な反応。

歌劇だけに（苦しいか）。

「というか、貴族の二人が逃げたところで、先は見えてるようなものだけ」

知っているのは仲が悪いというだけで、そういえば貴族だったかどうかは確かじゃない。

全てイメージでしゃべっている。

「……………」

なるは、ほとんど無表情で前を向いている。

よく見ると、その頬に少し朱が走っている、ような。

理由はよく理解できないが、駆け落ちという言葉に何か思うところがあったのだろうか。

ほとんど意識していないが、それでも十五歳の女子だから、多少は何かを考えても良いとは思う。それでこんなにも反応するのは、俺には分らないが。

我ながら、酷い事考えてるよなあ、と省みる。

「おい」

目の前で手をかざしたら反応した。そんなに茫然自失でもなかったようだ。

理由の方は、全く分からないけれど。

「まあ、何か吹っ飛んだけど、リアルに考えていかなきゃならないし、事態の急変なんてこともあるかもしれないし。

またなんかあったら、相談しろよ」

「…………… ああ」

最後、声が小さくて、『ああ』と言ったか、『おう』とか言ったか、『うん』なんて言ったのか、はっきりとは聞こえなかった。

意味不明・不確定だらけのミライ（後書き）

途中の図はそういうもんだ、くらいに見ておいてください。
変な図orz

ギジュツ（前書き）

感想・アドバイスなど歓迎です。というか下さい。

ギジュツ

私立榆宮高等学校、略して榆高。

その片隅の、狭くない多目的利用室に2クラス分、俺を含めて約60人の人数が入っている。

選択授業のために。

その名の通り自分で選ぶ授業で、魔法技術、工学、パソコンなどの多彩な分野から選び、受ける。

工学やパソコン（パソコンにもプログラミングや情報処理などがある）は生徒がパソコンや加工機械を前にして実際にやってみたりするのだが、講演っぽいものを聞いたりするだけのものもあり、魔法技術なんかはそれだ。

そして、今この多目的利用室で行われている授業は魔法技術。教卓のあるところに近くの大学から招いた男性が立っている。

俺の住んでいるこの小さな町にも、大学と呼べるのか疑いたくなるような小さな短期大学がある。小さいというのは敷地ではない。敷地はむしろ広い。小さいのはその活動規模だ。確か工学と魔法工学の二つしか学科はなかったはずだ。こうして招いて講演をできる程度にはちゃんとした大学なのだろうが。

その講師の人はまだ若く見える。実際、三十に届くかどうかなのではないか。この学校にこうして講師となる人を、と頼まれ、他に彼より年上の人がいるが、押し付けられてここにいる、という勝手な想像を抱く。

「……………それで、ドライアイスはとても冷たいものですが、冷たくないドライアイスというのがあります……………」

今日の話は融点・沸点の操作の技術だと言っていた。

「では、ここで質問です。同じ温度から同じ量の水を同じように加熱したとき、海拔0mと500mではどちらが先に沸騰するでしょうか？」

知っている。すぐわかる。

周りから、え、どっち？　とか、知ってる、というような声が聞こえてくる。

「うー、分からん。空哉、どっちだ？」

後ろのなるが困ったような顔で訪ねてくる。こいつは選択授業を何にするかを相談してきて、俺が魔法工学にしたのを見てすぐに魔法工学に決めた。というわけで必然的に一緒の選択になった。

その後ろで、『知っている』と言わんばかりの笑みでも何もないレオン。うざい。こいつと一緒にになったのはは偶然の一致だ。

面倒なので一言、『高い方』とだけ答える。

一瞬でへえ、という顔になったと思ったら、それまで黙っていたレオンがなるに説明し始めた。その説明は、周りにいる答えを知らない奴らにしっかりと聞かれている。

大体良いと思ったか、講師（名前は山田）が説明する。

「実は、同じ水でも標高が高い方が先に沸騰します。つまり、標高が高い方が沸点が低くなるということです。標高が高いと何が違うか。気圧が変わります。

圧力が低いと沸点が下がる。伴って融点も下がる。高校生にもなって沸点と融点分からない、なんてことはないと思いますが、それぞれ、水が沸騰する温度、氷が融ける温度です」

忘れてた、とか思いだした、という顔の奴がちらほら。

「で、その性質を利用した魔法が、さっき言った、冷たくないドライアイスです。これは水だけに限った話ではないので、二酸化炭素にも応用されます」

そう言って、横に置いてあったCO₂と大きく書いてあるスプレィ缶を手取る。キャップを外し、しゃかしゃかと振った。何をす

るのかと、ここにいるほとんどは興味津々、彼の手を凝視している。こういう時って様々な意味で無防備だよな、何とはなしに思う。

「今、ここには何もありません」

指で教卓の一点を示す。

「でも、こうすると……」

その一点が生徒に見えないように左手を立て、スプレー缶の噴出口をそこに近づける。（右利きだろうか）二酸化炭素のでてくる軽い噴出音がこの教室に充満する。誰も何の物音もたてないので、その音しか聞こえない。

彼が何かを隠していた左手をどける。そこに、白い、小さなブロックがあつた。おおっ、という声がそこかしこから聞こえる。彼が、回して下さい、と右端の生徒に渡す。それから、もう一つブロックを作り始めた。

気体として出てきた二酸化炭素が勝手に固体になるわけがないから、彼が自分で言った通り、無系統で魔法を使ったのだろう。しかし、余剰魔力が見えなかった。意識して見ていたわけではなかったから、意識しないと見えない程の余剰魔力だったのか、それとも、余剰魔力を発生させない程魔力のコントロールが上手いのだろうか。なかなかすごいところのある人物かもしれない、と心中でメモしておく。

「気体と個体では粒子間の感覚に差がありすぎるので、気体を個体にするには時間が必要ですし、気体も多く必要です。しかし、気体さえ準備し、魔法を工夫すれば、いろいろなことができます。例えば」

そう言つて、教卓のかけからさっきより一回り大きい二酸化炭素スプレーを出す。それを斜めにし、上の方を押す。

すると、さっきのような噴出音はなく、代わりに白いひものようなものがでてきた。

周りが、うえっ、とか、きもっ、とか、そんなようなことを面白がりながら言っている。面白がりながら言っている。大事なことな

ので二回言った。

「こんな風にすることもできます。……ちょっと気持ち悪いですが」
紐っぽいものは噴出孔から直^{じか}に出ている。ひもの太さは噴出孔の直径と同じようだ。

紐の製造をやめ、彼がその先をつまんで持ち上げる。普通の紐と同じようにふにふにと動くところをみると、紐自体が被魔法体（魔法がかけられたものをこう呼ぶ。かけられたものではなく今現在も継続して魔法が作用しているものがこう呼ばれるので、これが固体であるうちは被魔法体、気体になったら違うと言える）なのだろう。温度が違えど一応ドライアイスなので、柔らかいなんてことはあり得ない。

意識して見てみたが、やはり余剰魔力は見えなかった。俺の感性が低いせいということはないだろうし、これはかなりの魔法師（魔法技術者のこと）とみて間違いない。

こんな近くにこんなレベルの魔法師がいるなんて、とこの世の中の深さを意識する。

「では、最後の一つを作って終わります。手伝いが必要なので誰か」
壁の時計をチラツと見^み遣^やって言う。

彼が左端から3人、指名し、二酸化炭素スプレーを一つずつ渡す。いち、に、で押してくださいと言う声が聞こえる。

さっきの一点にスプレーを近付けさせ、合図する。

いちに、と聞こえた後は、その一点に、下から何かが、せりあがるようにドライアイスが大きく成長し、完成していくのが見える。

10秒もしないうちに彼が3人に止めるように言い、白い何かが完成した。それは、

500mlペットボトルサイズの自由の女神像だった。

おお、と教室中から喚声がわく。

「二酸化炭素の個体のドライアイスは白色ですが、酸素は青色です。そんな性質を使えば、カラフルなものも作れる可能性があります。窒素は分かりませんが。では、これで授業を終わります。あ、これは1時間で固体化が解けるので、放置で構いません」

言い終わると同時に、壁時計横の校内スピーカーからチャイムを模した音が鳴った。

ギジュツ（後書き）

空哉たちにテストとかやらせたいな！。

レオンがうざい&こいつキャラが勝手に動く。

あ、途中の「回す」というのは「順々に手渡していく」という意味です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1586s/>

魔法な少年と魔法な世界

2011年9月21日13時16分発行